

# 英 語 英 米 文 学 論 集

**Journal of English Language and Literature**

安田女子大学英語英米文学会

English Language and Literature Society,

Yasuda Women's University



# 目 次

## 人間的身体性に関する

精神分析の知見の持つ意義 .....	青 木 克 仁	1
--------------------	---------	---

虚構世界」と「現実世界」：小説を読む行為と 異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (15) ——ブランドステッター・シリーズ の持つ意義—— .....	青 木 順 子	19
---	---------	----

寄生空所構文の重心原則 .....	杉 山 正 二	43
-------------------	---------	----

## 著者紹介

## 活動報告，投稿規定

## 学会会則



# 人間的身体性に関する精神分析の知見の持つ意義

青 木 克 仁

## 要 旨

ジョルジョ・アガンベンは、ギリシア語には「生」を意味する語が二つあると述べている。一つは「ゾーエー (Ζωή)」で、「動物的に生きているという事実を表す言葉」である。もう一つは「ビオス (βίος)」で、「人間的に様式化された生 (政治・社会における人間), 善き生を表す言葉」である。このギリシアの伝統の延長線上にある, 近代的思考は, 人間を「生物的・生命的なもの (ゾーエー)」から区別し, ビオスとして最善の生を追求しようとしてきた。この「ゾーエー」と「ビオス」の二元的な思索に人間の身体性も引き裂かれてしまうことになる。本論考において, 何故人間身体はこうした二極に引き裂かれる運命にあるのか, という問いを提起し, 精神分析の知見に依拠しつつ, 答えを見出していく。

## 序 論

ジョルジョ・アガンベンは『人権の彼方に』の中で, ギリシア語には「生」を意味する語が二つあると述べている。一つは「ゾーエー (Ζωή)」で, 「動物的に生きているという事実を表す言葉」である。これは生物として生きている, という意味合いにおける「生」で, 「剥き出しの生」に当たる。もう一つは「ビオス (βίος)」で, 「人間的に様式化された生 (政治・社会における人間), 善き生を表す言葉」である。こちらの方は「物語性」のある生, 即ち, 意味を付与されたり, 正当化されたりする生である。アリストテレスは、『政治学』の中で, 人は生きるために生まれたが, 本質的には善く生きるために存在する, という, まさに, ソクラテスの「よく生きる」を引き継ぐ言葉を残している。ギリシアの伝統では, ポリスの公共性は, 「生命維持に関すること (ゾーエーの領分)」をオイコスに任せてしまうことで, 「善き生, 徳に基づく生 (ビオスの領分)」の追求を純化した結果として成立している。即ち,

オイコスは、生命としての人間の共通性に基づく空間で、奴隷や女性達を中心に維持され、そのお陰で、ポリスにおいて、成人男性は「善き生」を追求することが可能だった。従って、アガンベンが述べているように、ポリスの公共性は、「剥き出しの生（ゾーエー）」をオイコスの方へと排除することによって成立していたということになる。このギリシアの伝統の延長線上にある、近代的思考は、人間を「生物的・生命的なもの（ゾーエー）」から区別し、ビオスとして最善の生を追求しようとしてきた。この「ゾーエー」と「ビオス」の二元的な思索に人間の身体性も引き裂かれてしまうことになる。本論考において、私達は、何故人間身体はこうした二極に引き裂かれる運命にあるのか、という問いを提起し、精神分析の知見に依拠しつつ、答えを見出していこうと思う。

### 第1節 三つの世界説と人間身体

カール・ポPPERは、彼の *Objective Knowledge* の中で、「Thesis of the Three Worlds（三つの世界説）」(1972, p.153) なるものを唱えている。彼のいう「三つの世界」とは、「第一の世界 (World1)」である「物質的世界」, 「第二の世界 (World2)」である「心理的世界」, そして、人間の生み出した文化的産物からなる「第三の世界 (World3)」である。ポPPERは、この「三つの世界説」を進化史の中で捉え直している。「物質世界」から、或る時を境に「心理的世界」が出てきて、さらに「心理的世界」から、「第三の世界」が登場するに至るのだ。「第三の世界」は、それゆえ、ドーキンス流に言えば、ミームの世界なのだ。フレーゲやフッサールから着想を得たとはいえ、ポPPERは、彼自身の提唱した「三つの世界説」を、ダーウィンの進化論によって説明しようとした点で、より一層独創的であると言えるだろう。無機物の世界から有機物、そして生命が創発し、生命の中から意識が創発し、「心の世界」である「第二の世界」が誕生する。そして、意識を持つ生物の内、人類が言語の基盤の上に、「第二の自然」即ち、「文化」と呼ばれる「第三の世界」を生み出すに至ったのである。

フッサールやポPPERに靈感を与えた当のフレーゲは、「言語的転回」への道筋を

開き、その後の分析哲学をリードする大きなパラダイムを用意した。それは「第二の世界」を完全に排除し、「第三の世界」を「第一の世界」の上にマッピングさせていくことによって、人間の心的構造に左右されることのない意味論を打ち立てようとする「客観主義」と呼ばれる野心的な企てが 20 世紀の分析哲学を支配した。しかし、そのパラダイムの上に展開された「客観主義」の企ては、人間の心が論理的な計画を促進させ得るような純然たる理性などではなく、進化の産物に過ぎないということを忘れさせるに至ったのだった。私達は、人間の心は偶然が幾重にも織り成されて形成された進化の産物であるということを受け入れ、人間の心が身体化しているという「認知意味論」の基本的着想に立脚して思索を進めるべき時が来た。

人間は、「ゾーエー的な存在者」として、「第一の世界」に属している。しかし、アガンベンが古代ギリシアのポリスにおける生活を分析してみせたように、人間は「ゾーエー」的な生き方では決して満足せず、「善き生」を生きることを強く欲望する。つまり、「ビオス」として、もっと様式的な生を享受し、所謂「生き甲斐」を求め、己の生存の在り方を物語化したいと願っているのだ。人間的生には、「第三の世界」からの影響を受け、心的次元である「第二の世界」を如何に制御し、「ビオス」として形成していくのか、という課題が存在している。これは、「第三の世界」を創発させた人間という生き物に特有の課題なのである。「認知意味論」は「第二の世界」が如何に「第三の世界」を創発させたのか、というその蝶番に当たる謎を解明するのに相応しい理論として登場した。それだけではない。「第三の世界」に属する言語が、何故再び「第二の世界」、即ち、人間の心の興味関心を惹きつけ、学習されていくのかを解き明かす理論でもあるのだ。言い換えれば、「認知意味論」は「第二の世界」から「第三の世界」の基盤である言語が創発していき、その言語が再び「第二の世界」―特に言語習得期の子ども―の心―に根を下ろしていくのは如何にしてなのかを解き明かす理論なのである。その際に、基礎となるのは、人間が身体的存在者であるという事実なのだ。

人間の「身体性」は「第一の世界」と「第二の世界」との二つの世界の橋渡しとして捉えることのできる、メルロ＝ポンティ風に言えば両義的な場である。こうした両義性が何に起因するのか、ということを教えてくれる理論を提供してくれ

ているのが精神分析である。次節では、精神分析の知見に依拠しながら、人間の身体性が意味の生成に関わるのは何故なのかを考察していく。

## 第2節 人間の身体性は何故「第三の世界」に開かれてあるのか

ラカン、解剖学者、ボルクの「胎生児化説」を援用している。ボルクの「胎生児化説」とは、人は、霊長類のライフの中では、一時的な形態に過ぎない「胎児」の形態を、終生保持し、謂わば「胎児」の形のまま、生殖器のみが発達して大人になっていく、というものだ。幼い形のまま、成熟していくという「ネオテニー（幼形成熟）」こそが人間の担う宿命なのであるというのだ。このボルクの学説を補うために、ポルトマンの「生理的早産説」を援用しておこう。これは、一言で言えば、人間は未熟なまま生誕する、という学説だ。その理由として、大脳が発達し過ぎ、新たに大脳新皮質が加わった人類は、成熟してしまうと産道を通過できなくなってしまうゆえ、未熟なまま生誕してこなければならないというのだ。実際に、人間の赤ちゃんは、妊娠9カ月で産まれた後、最低限の感覚や運動機能が備わるまで、少なくとも1年の時間を要する。ボルグ、ポルトマンの学説を援用すれば、人間は未成熟のまま生まれてこなければ、産道通過がままならないという宿命を担っているがゆえ、外見的にも幼い形のまま大人になっていく。

こうした宿命を担う人間の場合、出産時に母親が命を落とすということがある。日本産婦人科医会の統計では、2010年1月から2016年4月にかけて、全国で298人の妊産婦が死亡しているが、この6年余りの死者数は毎年50人前後と横ばい状態で推移している。出産件数が年間100万人ほどだから、妊産婦死亡率は1%に満たないと言えるが、人類以外で外敵に襲われない限り、出産という理由で母親が死亡するというケースはない。出産時に、子宮内大量出血、血圧の上昇による脳出血、羊水塞栓症といった原因で死に至るのだ。成人の脳は1200立方センチあるがこれだけの体積は産道を通らない。けれども、400立方センチある新生児の頭でさえ大き過ぎるくらいで、それゆえ人間の妊産婦のみが出産時に「死」と隣り合わせとなる。新生児も未熟で生まれてくるゆえ、周囲の大人の助けなしには「自己保存」も



ままならぬ、寄る辺なき存在なのだ。

他の動物達の場合は、所謂「本能」によるガイドが生誕直後開始されるが、人間はこうした宿命ゆえに、「本能が壊れた動物」に成り果ててしまった。未熟で生誕する宿命を負った人間は、自己保存に従って生きることすら困難なのである。それゆえ、生誕後の赤ちゃんは周囲の手助けによって、おっぱいを咥えさせることから開始せねば、「食べる」という最も根本的なことすら叶わない。さらに、呼吸を司る中枢が未発達ゆえ、「周期性呼吸」として知られている現象が見られる。つまり、呼吸のリズムが乱れたり、呼吸をしていなかったりするのだ。これは「新生児無呼吸発作」と呼ばれており、新米の親は確実に慌てふためくことになる。従って、食べたり、呼吸をしたり、といった生存に最も根本的なことができない不能な存在なのである。

こうして「自己保存」にまつわる生物的に根本的なことが全くできない不能な存在者として生誕してきたにもかかわらず、まさに「本能が壊れて」しまっているがゆえに、フロイトの「幼児性欲説」が示すように、「性欲動」が生まれて間もなく発動することになる。このことが、人間の身に、諸々の悲喜劇をもたらすことになるのだ。

立木康介は『露出せよ、と現代文明は言う』の中で、フランスの精神分析家、クリストフ・ドゥジュールの「二つの身体」説を紹介している。彼の言う「二つの身体」とは、「生物学的身体」と「エロース的身体」の区別であり、前者は、「生理学、解剖学、神経学など、実証科学的アプローチによって解明されるレベルの身体性」で、後者は、「性欲動の発現の場となるため、セクシュアリティと結び付き、主観的、心理的経験の舞台となる身体性」のことを指す。

ドゥジュールの説は、二種類の欲動の内、一方が他方に寄り掛かって発達するとする、フロイトの「寄り掛かり理論」に依拠している。ここで言う「二種類の欲動」とは、「自己保存欲動（自我欲動）」と「性欲動」のことである。「自己保存欲動（自我欲動）」は、通常「生理的欲求」と呼ぶ生命維持に関わる欲動のことである。言い換えれば、飢え、渇き、排泄、睡眠などの欲求に代表される生命維持に関わる欲動である。

フロイトは自己保存に関わる本能と生殖に関わる本能を分けて考えているが、人間の場合、いずれの場合も本能からやってくる強大なエネルギーが発動した時、他の動物達のように、そのエネルギーを一定の行動様式に導いてくれる「本能プログラム」が作動しない。これこそ「本能が壊れている」という言葉が意味していることなのである。本能プログラムの導きを失った強大なエネルギーこそ「欲動」と呼ばれている心的な衝動なのである。フロイトの幼児性欲説は、まさに肉体的に生殖の実現可能性がない幼児の内から、この「性欲動」が発現してしまっている、という事態を問題にしているのだ。

「性欲動」は、本来は、生殖活動に関係し、その抑圧が神経症形成の条件となる欲動なのである。初めは、それぞれの身体器官に固有の満足を求める傾向性を形成していく。ちなみに、「リビドー」とは、性欲動に固有な心的エネルギーを指す。

フロイトは、生命維持に関わる「自己保存欲動」は初めから活動を開始するが、性欲動は自己保存欲動に寄り掛かるように発達するとしている。口唇期、肛門期、性器期、といった具合に、本来の生命維持に寄り掛かるように、各器官に固有の快を再現しようとする。例えば、「口唇期」においては、本来は「栄養を補給するために使用される」口や唇といった器官が、快楽のための器官に塗り替えられてしまう。人間の場合、そうにでもならない限り、乳を吸うという行為に執着しなくなり、死を迎えてしまうことになるだろう。幼児が己を慰めるために行う「指しゃぶり」は、まさに母親の乳房に食らいついている時の快感を幻想の内に召喚しようとする行為なのである。長じてからも、口唇が快感の場となっている人間だからこそ、恋人とキスをするといった形で口唇を使った愛情表現を行うのだ。2歳から4歳頃までの時期は「肛門期」と呼ばれている。「トイレトレーニング」によって排便を意識し、コントロールの方法を教えられる。排便の快感、コントロールする快感だけではなく、その産物である便にも愛着を覚える時期だと言われている。この時期は「Terrible two (恐怖の2歳児)」と英語でも呼ばれている反抗期にも重なるため、親に逆らって適切な場所で排便をしない等のやり方で親が困るのを見て、逆に、親を支配する

喜びを得る。かくして、本来は排便をするという生命維持の器官である肛門が「性欲動」発現の場になってしまう。言い換えれば、性欲動は、自己保存のための器官であるはずの身体器官を乗っ取り、それぞれの器官に固有の満足を再現する働きとして姿を現すのである。この働きを「自体愛 (Autoerotismus)」と呼ぶ。これは、生理的欲求の満足に伴う副産物としての快が自己目的化していった、快のために快を求めるといった具合に快を実現する行為を強迫的に反復してしまうことを指している。精神分析において、「固着」とは、「性欲動が当該器官の快不快に執着してしまうこと」を指し、「退行」とは、「過去の固着点に遡って症状を形成してしまうこと」を言う。

かくて、性欲動は通常の性行為の範囲を越えて、人間的生の隅々にまで行き渡っていく。先ず自己保存欲動によって活性化する身体部位は、結局、性欲動の場としてエロース化していくのだ。これに伴い、生理的・生物学的身体は、エロース的身体に変化し、身体全体が情動の場へと転換していく。従って、人間は「見る」「聞く」「食べる」「嗅ぐ」「触る」といった五感に関することをも「～したい」という欲望の言語を使って語るのを常とするようになっていく。五感も本来は「自己保存」のための器官であり、進化論的には、生命維持という目的のために発達してきたはずである。しかし、その「自己保存」の場であるべき五感が人間の場合は快楽を追求する場に様変わりしてしまっているのだ。かくて、「美味しいものを食べたい」とか「美しいものを見たい聞きたい」とか、五感に関することにも「欲望」が関わっており、「好奇心」という人間特有の現象の源泉ともなっている。ゆえに、人間にだけ、芸術という行為が存在している。

性欲動は、かくて、「快」を追う欲動として自己目的化、「自体愛 (Autoerotismus)」化していくことで、生物学的身体を乗っ取ってしまうのである。エロース的身体が生物学的身体を乗っ取って、身体がリビドーによって再組織されて初めて、他者との人間らしいやり取りが可能となるのだ。当然、そこには自己保存という「必要性」を超えた「過剰」がある。人間身体は「自己保存」を超えて「過剰」に向かう。もし「本能」が正常に働いているのなら、過不足のない適切な行動様式に導いてくれることだろう。しかし、人間の場合、まさにこ

の「適切さ」を超えて快楽を追求する「エロース的身体」と化してしまっている。快楽のこの過剰さを支えているのが、まさに「意味の次元」、ポパーの言う「第三の世界」なのだ。他の生物種から見た場合、ここにこそ、人間の「異常性」がある。ギリシア神話の「エロースとプシュケの話」において、プシュケ、即ち、人間の魂、—これこそ人間の本質とされているが—は、エロースと結び付くが、この神話は、人間は「エロース的身体」を己の本質とするということを教えてくれているのだ。

アリストテレスは、「あらゆる人間はその本性として知ろうと欲する。このことを指示するものは、われわれが感覚において味わう喜びである。なぜならば、その有用性を離れても感覚はそれ自身のために愛されている」と述べる。動物の本能は、進化の道筋の中で「有用性」から離れることは死を意味するがゆえに、「有用性」を離れるということは決してあり得ないだろう。しかし、人間だけが、進化の中で発達したはずの感覚における有用性を離れて、アリストテレスが指摘しているように、感覚することそれ自身に喜びを見出すことができるようになってしまっている。ゆえに、美術や音楽を発展させてきたのである。人間身体は、まさに、「生物学的身体」から「エロース的身体」へ変容し、「生物学的身体」に関することは、むしろ、学問的探求の助け無しには全く無知な存在と成り果てた。

「本能の壊れた動物」としての人間は、身体性のレベルにおいても、生物学的身体からエロース的身体への変容を被る。「本能」が壊れてさえいなければ、人間も「ゾーエー」の次元にとどまって生きていくことが可能だっただろう。人間の場合、「ビオス」という「善き生」の在り方に拘るようになるが、その際、ただ生きていればいいのではなく、己の「生命/生活の質 (Quality of life)」を問題視する。「生命/生活の質」を巡る議論において、人間の場合は「生物学的身体」のレベルの健康ということだけではなく、「エロース的身体」のレベルにおける快楽さらには享楽という面がむしろ「人間らしさ」を決定づける要因として前面に出てくる。「生命/生活の質」を希求する人間は、生き甲斐を求め、己の人生を一つの「物語」として有意義なものに纏め上げようとするだろう。

「人間は本能が壊れた動物」である、ということの意味は、「欲動」と呼ばれる本能からの強大なエネルギーだけが与えられて、そのエネルギーを如何に解消したらいいのか、ということを教えてくれる「生得的プログラム」が欠けているということの意味する。この欠如した「生得プログラム」を代理するものが「言語」をはじめとする「習得プログラム」なのだ。つまり、人間の場合、ネオテニーという宿命を担うがゆえに、「本能」が壊れ、その壊れた本能を代理するために「言語」を習得し、「第三の世界」を築かざるを得なかったのである。

### 第3節 「他者の言語」

「壊れた本能」の代理を「言語」による「習得プログラム」に行わせるというのが、人間が生存していく上で、どうしても受け入れなければならなかった戦略なのだ。ただ残念ながら、「言語」によっては「壊れた本能」の代理をすることは絶対に叶わないのである。精神分析では「言語」はわざわざ「他者の」という形容をつけて「他者の言語」と呼ばれる。

繰り返すと、人間の場合、「本能」は欲動を発現させる力のみで、解消の仕方がプログラムされていない。それゆえ、欲動の強大なエネルギーをどうしていいかわからないのである。この「どうしていいかわからない」という一事を高尚な言葉で「自由」と呼んでいる。「言語」が「本能」の代理物になるが、「言語」は「他者の言語」ゆえ、完全な代理は不可能なのだ。

人間は「考える」動物であるがゆえ進化の頂点であると考えらるきらいがある。思考とは、とどのつまりは、言語による「内語」、つまり、心の中（あるいは、脳内）で「言語」を使うこと、に他ならない。けれども、母国語として私達は日本語を話しているが、それは「他者の言語」なのである。私達自身が発明したわけではないし、自然発生的に脳内に芽生えたわけでもない。しかも言語はコントロールし得ない「他者（異物）」として現れることが多々ある。例えば、「言語幻覚」として知られる現象が存在する。これは入眠時に脳裏に浮かぶ想念なのである。私達はこの入眠時の想念を全くコントロールできていない。自分の脳内（あるいは心の内）で、言葉が勝手に動き始めるのだ。あるいは「夢」という事象を考えてみたらいいのだ。

う。「夢」の舞台は、私の脳内であるにもかかわらず、夢の登場人物の言葉のやり取りを私がコントロールしているわけではない。言葉が「夢」の登場人物の口を借りて勝手に脳内で動いているのだ。あるいは、マーク・トウェインが『人間とは何か』の中で紹介しているように、突然、心の内に、流行歌のサビの部分が自動再生され、止めたいと思っても止められないといったことがある。あるいは、言い間違いやど忘れといった事象も、私達が「言語」をコントロールするのに困難を覚えているということの証となるだろう。つい最近も「Goto キャンペーン」と言うべきところを「強盗キャンペーン」と言ってしまったり、「云々」を「でんでん」と読んでしまったりした政治家が話題になっていたが、下手をすれば政治生命が終わるかもしれないような言い間違いを何故してしまうのか。要するに、「言語」という異物は、私達の心の中で、コントロールし得ないという意味において、過剰なものとして存在する「他者」なのである。言語は「他者の言語」であり、喩えて言えば、親や先生から教えられることによって外から「インストール」されねばならないような「寄生物」なのである。寄生物なのに私達の「心」を形成し、一旦インストールされてしまうと、コントロールの難しい「他者（異物）」のままに留まり、心の外に追い出すことが不可能となる。こうした言語の主体のコントロールを超えてしまうものが、本能の代理なぞできようはずがない。

フロイトが影響を受けた哲学者としてショーペンハウエルの名前が挙げられるが、ショーペンハウエルは、人間の本質を「盲目な意志」と考えていた。フロイトはここから「無意識の欲望」という概念を捻出したわけだが、「意志」あるいは「欲望」が「盲目」ということは一体如何なる事態だろうか。私達が何かを欲望する時、現在、その欲望の対象となっている「何か」が欠如しているから欲望するのである。恋人が欲しいと思っている人は、現在、まさにその恋人がいない、即ち、欠如しているから、欲しいと欲望するのである。だが「欲望」が「盲目」であるということは、そもそも何が欠如しているのかが分からないという状態を指す。これこそが、本能の「生得的プログラム」が欠けている人間が陥ってしまっている状態なのだ。つまり、何か欠けているが、その何かが分からぬゆえ、一生「欲望」し続ける、

それも言語を介して意味の次元において探し続ける、という宿命を背負っているのが人間なのである。

或る日、たまたま欲望が満足されると、人は欲望を満足させてくれた対象にしがみつが、これが、精神分析が言うところの「固着」ということだ。人はかくて、一時的にでも満足させられたものに強迫的にしがみつぎ、その満足の経験を、強度を求めて反復しようとする。例えば、子ども時代に、初めてたまたま口ににしたラーメンの味に固着し、「もっと美味しいラーメン」を反復的に求め続けるといったことが起きてしまう。あるいは、もっと極端な例を取るのなら、或る人がたまたま火をつけた時に快楽を覚えるとなると、同じ行為を強迫的に反復しようとしてしまう。それも「もっと強い火だったら」とか「もっと広い範囲の火だったら」といったように言語を介して意味の次元でより強度を求めて強迫的な反復を開始してしまう。かくて、欲望が放火に繋がる「衝動制御障害」という症状が生まれてしまうことになる。人によっては、性欲動が殺人妄想と結びついてしまうといったことさえあるわけで、猟奇的な殺人に繋がるような妄想に支配されることになるのだ。正常とされる成人も、幻想、妄想の世界で遊ぶわけだから、異常と正常は社会的に許容されるかどうかの違いであり、或る意味、五十歩百歩なのである。

かくて、「他者の言語」の受容は、意味領域における「過剰さ」へと人間を開くことになってしまう。「第三の世界」の創造は、「本能の壊れた動物」たる人間の宿命と言ってよい。そこにおいて、人間は「ビオス」としての生を享受することになるのだ。

#### 第4節 隠喩的な生

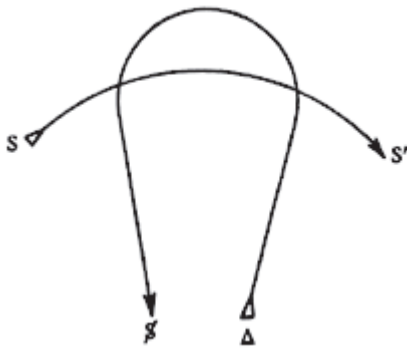
人間の場合、「ゾーエー」的生と「ビオス」的生が二極に分裂するのではなく、「ゾーエー」的生が「本能」の導きを失ってしまった結果として言語によって「第三の世界」を構築し、そこで「ビオス」的生を展開することで、「ゾーエー」的生を補完しようとするのである。

「第三の世界」を支えるものとして、人間が誕生する以前に既に言語が存在している。そして、人間の子どもは、まさに本能の「生得プログラム」によるガイ



ドを失ってしまっているがゆえに、生誕と同時に必死に言葉を受け入れねば己の生存が危ぶまれるような「強制的選択」を迫られることになる。生存するためには、言語を受け入れざるを得ないということを、ラカンの「刺し縫いボタン (point de caption) の図」を使って確認しておこう。

ラカンによる「刺し縫いボタン (point de caption) の図」は、言葉によるコミュニケーションの結果、いかに欲望が生まれるのか、を教えてくれる。人間は胎児であった時は、子宮が、栄養分から何から、必要なものが全て供給されていた。端的に生きることができる、そんなパラダイスに存在していたと言えよう。ところが、「生理的早産」の所為で、未熟なまま、産み落とされてしまった瞬間から、子宮にいた頃のようにはいかなくなる。飢餓感、寒さ、窒息感などあらゆる不快さが襲う。もはや子宮が保護してくれはしない。自分の肺や喉、口、鼻を使って呼吸することすら分からぬ赤ちゃんは、こうして試行錯誤の苦痛に満ちた「叫び声」を上げる。ゾーエー的次元においてさえ不能な存在なのだ。



さて、この奇妙な図の下側にある「 $\Delta$  (デルタ)」の記号は、言語の主体となる以前の幼児が発する「生物学的な満足を得ようという叫び」である。幼児の叫び声が向かう対象を「母」と名付けることにしよう。「母」は、身体の統一感を欠いている幼児が、最初にすがざるを得ないような、そんな「文化装置」

の名前なのだ。幼児は無力に地を這う寄る辺なき存在者に過ぎない。図の中の幼児のいる位置である「 $\Delta$ 」から、こうして、上に向けて、生物学的欲求の満足を得ようとする「叫び」が発せられる。こうした生物学的な必要を母親は満足させる能力を持っているが、子どもにとっては、母親がどのようにして自分の必要性に応えているのかは全く不可解なのだ。或る時は、必要性に応えてくれるし、また或る時は、必要性は中々満たされないままに置かれてしまう。しかも、発せられた「叫び」に



対して、幼児にとっては、全く不可解な「音の連鎖（シニフィアンの連鎖）」が母親の口から発せられ、彼の上空を飛び交う。「叫び」を発すると、この「音の連鎖」に迎えられることになる。この「シニフィアンの連鎖」は、言葉の「連辞関係」に従って、線状に一繋がりに発せられる。発せられた「叫び声」は、「シニフィアンの連鎖」によって、絡み取られ、或る限定された解釈を施されることになり、一つの意味を付与されるだろう。そして「シニフィアンの連鎖」に絡み取られることによって、「空腹」、「おむつの濡れた不快感」、「痛み」、「寒さ」などの「意味（シニフィエ）」を獲得し、以降、「母」に向かう、正体も分からぬ苦痛による無限定なる「叫び声」は、限定された意味を持つ「訴え」になり、幼児は、かくて、「象徴界」に参入していき、きちんとした「人間」になる。動物的な「叫び」が、「シニフィアンの連鎖」に掬い取られ、人間的な「訴え」に変換されるのだ。言葉を通して、「訴え」の形にしないと決して必要を充足できないことを幼児は学んでいく。「叫び」は、自分のものではない、外部から与えられ、学習していかなければならないような「他者の言語」によって言い当てられなければならないのだ。人間の幼児は、言葉によって解釈される過程を経ないと、正体も分からぬ無限定な苦痛の中で死んでしまうことになるだろう。けれども、言葉によって限定されてしまう際に、言葉では決して汲み尽くし得ないものを抑圧することになるのだ。

かくて「本能の壊れた動物」である、人間は、「ゾーエー的」な次元に純粋に留まることは不可能なのだ。まさに、生存するために、「ビオス的」な「意味」に補足された「生」に飛躍しなければ、ただただ死が待ち受けているからだ。「本能」が十全に働いているのなら、「ゾーエー」の次元に留まり、生理的な欲求を如何に充足させるかということは全て「本能」の「生得プログラム」が処理してくれるゆえ、純然たる「存在」の充実を味わうことができることだろう。一言で言えば、「本能」が壊れてさえないなければ、人間はまさに「野の百合」のように「存在」し得るのだ。

かくて、人間は生の充足を諦めるのと引き換えに言語を話す主体になっていく。精神分析学者の佐々木孝次との対談の中で伊丹十三は、幼児の初期の言葉は「一語文」なのに、全てを意味している「全体語」なのだという。伊丹が挙げて

いる例をそのまま使って説明しよう。例えば、赤ちゃんが「マンマ」と発声する。この「マンマ」というシニフィアンが何を意味しているのかは不明だ。例えば、幼児による「マンマ」という発話は「おっぱい」や「食べ物」を意味しているだけではなく、「ママ」であるかもしれないというだけではなく、「一緒にいて欲しい」「私は寂しい」「こっちに来て」など、様々な内容を意味している。このように多様な意味を込めて使われるのが「全体語」なのである。従って、赤ちゃんや幼児の言葉は「一つの意味」に限定され得ないということになる。確かに、子宮内では「全体語」に対する十全たるシニフェがあり得たのだ。即ち、子宮内においてのみ、ヒトはまさに「野の百合」のごとき充実した存在として生きられたのだ。

赤ちゃんの立場からしたら、「全体語」としての、こうした多義性を受け入れることで、言語による意味作用の世界に初めて参入し得るということになる。つまり、人間は意味の一義性に限定されることなく「言語の世界（象徴界）」に参入する。どの人間も例外無しに、「全体語」が示すような多義性を受け入れているのだが、この多義性の受容こそが、後に隠喩的な創発性を発揮するための宝庫となるだろう。隠喩とは、或る何かを他の何かによって示すという意味作用なのである。「マンマ」という表現は多義性に向かう隠喩なのだ。伊丹の挙げていた「マンマ」という例が示しているように、子宮が約束していた「存在の充足」から放擲されてしまった幼児が発する「一語」は常に既に多義的であるが、「象徴界」においては「全体語」の持つ多義性を充足し得ないということこそが、「盲目的欲望」という言語の主体の根底を形成することになるのだ。人間は「言語の主体」となるのと引き換えに、「心」に「欠如」を抱えた存在者になる。主体とは「隠喩」によって構成されると言っても言い過ぎではない。なぜならば、隠喩とは、何かを他の何かによって示す運動だからだ。けれども、ここで言う「何か」とは「欠如」であるがゆえに、どんなに隠喩を駆使したとしても、一生埋め尽くすことのできないような「欠如」なのであるが、この「欠如」こそが欲望を駆動するのである。

## 結 語

霊長類、特にチンパンジーの研究で著名な松沢哲郎は、人間とチンパンジーの違いについて、チンパンジーは直感像記憶の能力を発達させ、ヒトは「不在のものに反応する能力」を発達させた。モニター上に0.2秒だけ、7つの数字をチンパンジーに提示した場合、正当率8割で記憶し、8つの数字を提示した場合、正当率6割で記憶してしまう。これに対して、人間は、5つの数字の場合でも、正当率5割以下という結果となってしまった。フォトグラフィック・メモリーの能力は、チンパンジーの方が圧倒的に優れているという証拠である。チンパンジーは、優秀なフォトグラフィック・メモリーの所為で、目の前の「今、ここ」に囚われてしまう。それに対して、人間の場合、「不在のものに反応する能力」は、「象徴（言語）」を手に入れる条件なのである。人間の場合、「赤」というシニフィアンは、目下不在の他のシニフィアン、「黒」、「白」、「青」などの地平全体との差異という形で表現され得る。フロイトが記述している「フォルト・ダー」の遊びの中で、子どもは、「欠如」を記すことを見出す。「オー／アー」という音素を対立させる遊びは、子どもを象徴界へと連れて行くのだ。「象徴」は「欠如」を記すが、それを満たすわけではない。言語の中に欠けているものが、「欠如」のシニフィアンとして先ず置かれることは、言語の効力を保証するのだが、それは「欠如」を巡るシニフィアンの連鎖の発端を記し付ける。ラカンにおいては、この「欠如」のシニフィアンが、「象徴的ファルス（Φ：グラン・フィエ）」と呼ばれている。この「欠如」に対する隠喩的な置き換えが「人生」と呼ばれる死までの「猶予期間」において最後まで続けられることになるのだ。

「フォトグラフィック・メモリー」を有するチンパンジーとは異なり、子どもは、ネオテニーの宿命ゆえ、神経系が未熟なまま生誕するため、例えば、樹木の種類を一々覚えることができないが、その粗削りな記憶は「木」という、等身大の中間カテゴリーを確実にマスターする。このように特定の語連合を一々記憶することの不可能性、発話の数語しか、短期記憶し得ないこと、などといった子ども特有の未熟さが却って、言語学習の際には有利に働く。語一対象の関係から注意を逸らせることによって、記号間の組み合わせの上位パターンが存在に気付くことができるようになるからだ。

かくて、子どもの未熟な脳は、インデクシカルな語—対象関係から、記号レファレンスへとシフトする能力を未熟さゆえに発揮し得る。語—対象関係の詳細に拘ってしまったり、語—対象関係の因果性に拘泥してしまったりしたら、それで身動きが取れなくなってしまうだろう。実際に、チンパンジーの言語訓練の場合、その「フォトグラフィック・メモリー」が邪魔をして、語—対象関係に拘泥してしまい、その段階を抜け出ることができなくなる。語—対象関係の細部に拘泥することができない、子どもの神経系の未熟さゆえの認知的な粗さは、記号間の差異を確立するには十分な認知的な差異を提供するのである。

人間は、ネオテニーという宿命を担い、その所為で、認知的な未熟さを抱えたまま生きることになってしまったということへの注目が精神分析によってなされたが、この未成熟さゆえに、認知的粗さを乗り越えてしまうような干渉が存在しないまま言語環境に晒されることが幸いな偶然として働いたということに驚かすにはいられない。

同様に、「全体語」に対応し得る「子宮」という樂園から、ネオテニーの宿命ゆえに追放された乳児は、「全体語」が叶えられる「存在充足」を求めて「象徴界」に参入するものの、「全体語」の有する多義性を即刻満たし得る理想的な「シニフィアン」は残念ながら「象徴界」には見出し得ない。なぜならば、言語は一義性を理想とする世界ゆえ、「全体語」の企ては常に既に挫かれることになるからだ。にもかかわらず、人間の意味作用は多義性に向かい、常に多義性に開かれるのだ。まさに、ここにこそ、人間が隠喩を理解し得るということの故郷が存在している。隠喩表現、隠喩理解といった事象は、あまりにも人間的なのだ。

コンピュータに言語を学習させる企てにおいて、多くのことが障害になり得るが、一義性の理想から出発し、「語—対象関係」を学習させていくという過程を経るコンピュータに対して、人間の場合は多義性の実現を希求して「象徴界」に飛びつくが、そこでは多義性の挫折が待ち受けていることになり、ゲーテ風に言うのならば、まさに「人生」が一つの比喩として形成されることになるのだ。

引用・参考文献（引用頁は本論中に記す）

立木康介, 2013, 『露出せよ, と現代文明は言う』, 河出書房新社.

トウェイン, マーク, 1973, 『人間とは何か』, 中野好夫訳, 岩波文庫.

ドーキンス, 「利己的な遺伝子と利己的な模伝子」 in 『マインズ・アイ (上)』, 坂本  
百大監訳, TBS ブリタニカ, pp.181-211., 1992.

フロイト, ジークムント, 1996, 「快感原則の彼岸」『自我論集』収録, 中山元  
訳, ちくま学芸文庫

ラカン, ジャック, 1972, 『エクリ』 I-III, 宮元忠雄他共訳, 弘文堂

ラカン, ジャック, 1986, 『家族複合』, 宮元忠雄他訳, 哲学書房

ラカン, ジャック, 1987, 『精神病』 上下, ジャック=アラン・ミレール編, 小出浩  
之他訳, 岩波書店

ラカン, ジャック, 1998, 『フロイト理論と精神分析技法における自我』 上下, ジャ  
ック=アラン・ミレール編, 小出浩之他訳, 岩波書店

ラカン, ジャック, 2000, 『精神分析の四基本概念』, ジャック=アラン・ミレール編,  
小出浩之他訳, 岩波書店

ラカン, ジャック, 2002, 『精神分析の倫理』 上下, ジャック=アラン・ミレール編,  
小出浩之他訳, 岩波書店

ラカン, ジャック, 2005, 『無意識の形成物』 上下, ジャック=アラン・ミレール編,  
小出浩之他訳, 岩波書店

ラカン, ジャック, 2006, 『対象関係論』 上下, ジャック=アラン・ミレール編, 小  
出浩之他訳, 岩波書店

Lakoff, George and Johnson, Mark, 1980, *Metaphor We Live By*, Chicago : Chicago University  
Press.

Johnson, Mark, 1987, *The Body in the Mind*, Chicago: Chicago Univ. Press. (邦訳, 『心の  
中の身体』, 菅野盾樹他訳, 紀伊国屋書店, 1991)

Lakoff, George, 1987, *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: Chicago Univ. Press.  
(邦訳, 『認知意味論』, 池上嘉彦他訳, 紀伊国屋書店, 1993)

Popper, Karl, R., 1972, *Objective Knowledge*, Oxford: Oxford Univ. Press.

「虚構世界」と「現実世界」：  
小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (15)  
—ブランドステッター・シリーズの持つ意義—

青 木 順 子

要 旨

ジョセフ・ハンセンのブランドステッター・シリーズは、1970年から1991年の間に渡って12作が刊行されたミステリー作品である。毎回、主人公のブランドステッターが生命保険会社の調査員とし死亡事件の真相を解明する。社会で普通に生きる同性愛者を描くことを目的として、知的で魅力的な主人公、同性愛者の探偵を登場させ、社会の抱える矛盾を必然的に扱えることになるミステリー・ジャンルを活用する等、作者のハンセンは丁寧に構想を練り、本シリーズを世に問うている。シリーズでは、同性愛者への偏見だけでなく執筆当時の多様な社会問題をテーマとして扱っており、80年代の同性愛者とエイズについても細緻な筆致で描いてみせている。扱われた社会問題自体は時を経て「歴史」となっていくても、「普通」のこととして同性愛者の探偵を主人公におき、ロマン・ノワールの物語を徹頭徹尾貫いたことで、このシリーズの永遠性は確約されたといえよう。

は じ め に

ジョセフ・ハンセン (Joseph Hansen) [1923-2004] によるブランドステッター・シリーズ<sup>1)</sup>は、1970年に第一作が発表されて、1991年の第12作で終わった一連のミス

<sup>1)</sup> 本稿では、原則として、本の題名（初刊発表年）で示す。原文には、シリーズ内での刊行順番と頁数を示すこととする。原文についている日本語訳は、すべて筆者自身によるものである。本稿中で原文を引用した作品については、出版社を記載している。以下、著者は全て Hansen, Joseph である。① *Fade Out* (1970) The University of Wisconsin press ② *Death Claims* (1973) ③ *Troublemaker* (1975) ④ *The Man Everybody Was Afraid Of* (1978) Henry Holt, 1978 ⑤ *Shirlock* (1980) Panther Book ⑥ *Gravedigger* (1982) ⑦ *Nightwork* (1984) ⑧ *The Little Dog Laughed* (1986) Henry Holt ⑨ *Early Graves* (1987) ⑩ *Obedience* (1988) ⑪ *The Boy Who Was Buried This Morning* (1990) ⑫ *A Country Of Old Men* (1991) Penguin.

テリー・シリーズである。21年にわたって数年ごとに発表された作品では、毎回、主人公のブランドステッターが生命保険会社の調査員として会社の保険に関わる死亡事件の真相を解明する。1970年当時、数多く出版されるミステリー・シリーズと比べて異色であったのは、主人公ブランドステッターが同性愛者であること。毎回異なった社会的問題と関わる事件を扱うと同時に、シリーズを通してブランドステッターも年齢を重ね、彼の人生における変化も描かれていく。本稿は、社会への問題意識とミステリーの関係、80年代の同性愛者とエイズの描かれ方、同性愛の主人公の意味することと影響、作家と作品に書くことの関係、の4つの観点で考察することで、このシリーズが持っている意義とは何なのかについて考えてみたい。

## 1. 社会への問題意識とミステリーの関係

1970年刊行のシリーズの一作目 *Fake Out* は、同性愛者である主人公ブランドステッターの過去のすでに亡くなった恋人についての回想が入る、いわば主人公のプロフィールを紹介する作品でもある。そこに同性愛者の死亡事件の調査をからめて、同性愛者の人生、社会の偏見、人間の普遍的な欲望と愛情模様を盛り込んで物語は展開をする。2作目からは各作品がその当時の社会的な問題をテーマとして扱う物語となっている。毎回ブランドステッターと恋人、また時には他の登場人物として同性愛者が登場し、同性愛者の物語はごく自然な形でシリーズを通して語られている。1990年発行の「ミステリーマガジン」<sup>2)</sup>が、ジョゼフ・ハンセンを特集しているが、その中で、1979年の『マーダレス・インク』に収録のエッセイから、同性愛者の姿を扱うことがこのシリーズ作品のハンセンの執筆目的であったことを紹介し、インタビューでのハンセン自身の発言を紹介している―「ホモセクシュアルの人たちが現実の人間であることを示し、彼らを正面から、曖昧さのない知的な態度で扱いたいと願っている」<sup>3)</sup>、そのための彼の仕事は、レポーターとして同性愛者について正直に伝えること、としているのである。

<sup>2)</sup> 「ミステリーマガジン」 No.410 1990年6月号。

<sup>3)</sup> ウィン、デリス 小林武（訳）「ハゲを生やしたゴシック・レディ」『ミステリーマガジン』 No.410, p11.



「作品のあちこちにホモセクシュアルについての通念に対する反駁を盛り込んだ。1970年といえども昔まえだから、『闇に消える』で私が逆転させてやろうともくろんだ世間一般の誤解はいちいち思い出せない。私は自作の中で、善良なもの、邪魔なもの、弱いものも強いものもおしなべて、ホモセクシュアルたちの描写を一步一步進めてきた。それは私がいくぶん詳しく権威をもって語れる人生の側面だし、私に向いた仕事だった。プロパガンディストではなく、嘘いつわりのないレポーターとしての仕事のことだ」<sup>4)</sup>

主人公が同性愛者であるために、同性愛者に関わる社会の諸相についてはシリーズを通して何度も示されているが、それと並行して、シリーズ作品が異なる社会問題をテーマにしたことについても、ハンセンの言葉がある。

「同性愛は、つねに私の唯一の関心事ではなかった。歳月が過ぎ、何冊も本が出るうちに、デイクやその他の登場人物の同性愛がしだいにマスコミで話題にのぼらなくなったのは結構なことである。同性愛が幅広い織物の糸の一本にすぎない、ということを受け入れる読者を得たのである」<sup>5)</sup>

毎回の事件のテーマとして、いかに多彩な社会問題が扱われているかについては、以下、簡単に題名の後に主なテーマをリストしてみただけでも明らかである。

- ① *Face Out* (1970) 同性愛、探偵の過去
- ② *Death Claims* (1973) 薬物中毒
- ③ *Troublemaker* (1975) 同性愛、悪徳弁護士
- ④ *The Man Everybody Was Afraid Of* (1978) 公民権運動、汚職、悪徳警官、愛国心、家族
- ⑤ *Shirlick* (1980) 児童ポルノ、偽善者
- ⑥ *Gravedigger* (1982) 新興宗教、大量殺人
- ⑦ *Nightwork* (1984) 企業の有害物質の不法投棄、ストリート・ギャング
- ⑧ *The Little Dog Laughed* (1986) 中南米での政治紛争
- ⑨ *Early Graves* (1987) エイズと同性愛者
- ⑩ *Obedience* (1988) 亡命ベトナム人社会、米国の人種差別
- ⑪ *The Boy Who Was Buried This Morning* (1990) 人種差別団体、戦争ゲームに興じる若者
- ⑫ *A Country Of Old Men* (1991) 老い、死、子どもの虐待

こうした社会問題の諸相は、このミステリー・シリーズで実際にはどのように描かれていたのかについて、ここではシリーズの2作品から数例を示してみたい。以下、4作目、*The Man Everybody Was Afraid Of* (1978)からである。黒人やゲイに対して偏見を持つ専制的な警察署長オートンの死に関わる調査の過程で、警察側の偏見である「モラル欠如の普通の人間レベル以下」の同性愛者像が、当然のこととして

<sup>4)</sup> ウィン, p.62.

<sup>5)</sup> ウィン, p.62.

ブランドステッターに向けて語られる。“weirdos”, “germs”, “venereal disease”, “pervert” といった侮蔑語の連続である。

“People wouldn’t sign these petitions if they knew what homosexuals are really like. Police officers know that—how these weirdos live their lives. Alleys. Public toilets. Back rows of dirty theaters. What they do—with men they never saw before. Anybody. It’s not just that they’re mentally sick. They spread germs. You get people like that in your police-department locker rooms—you could have your whole police force down with venereal disease. Is that what the people want that are singing these petitions? Well, I can tell you, it’s not what the police officers want—or their wives.” (④—p.35) (「もし同性愛者が本当はどんなものか分かっていたら、こんな請願書には署名しないね。警官は分かっているから、これら奇人の輩がどんなに生きているかね。路地、公衆トイレ、暗い映画館の後列で。一度も会ったこともない男たちと、誰とでもだ。精神の病というだけでないんだ。ばい菌をまき散らすんだ。こんなやつが警察のロッカールームにいたら、警官全部が性病でダウンしてしまう。それがこれらの請願書に署名した時人々が望んでいたことかね。ともかく言えることは、警官が望んでいることではないね。警官の妻もね」)

“Leave that out if you want to. The whole idea is ridiculous, any way you look at it. What man you know is going to want to be stuck in a patrol car eight hours a day with some pervert? And suppose there’s trouble—and trouble is what that patrol car is out there to stop. Can you picture some homosexual charging a house where some crazy is shooting guns out the window? I’d hate to see the face of the mother who’s signing one of these petitions today when she finds out later a homosexual police officer has been sent to find her lost six-year-old son.” (④—p.36) (「もしそうしたいなら、忘れてくれ。考え自体がばかげている。どう考えてもね。変質者と一日 8 時間パトロールカーにいたい奴なんて知っているかい。何か事件があって、その事件を止めるためにそんなパトロールカーが出ているなんて。窓からおかしなやつが銃を撃っている家をホモセクシュアルが引き受けたらってね。今日請願書にサインした母親が、彼女の行方不明の 6 歳の息子を探すのにおくられてきたのがホモセクシュアルの警官と分かったら、一体どんな顔をするかってことだ」)

一方、偏見を向けられ反撃をするべき側の同性愛者の気持ちが一枚岩というわけではない。偏見の構図はそんな単純なものではないのである。熱心に公民権運動に関わるゲイ活動家の中には、ゲイパレードでのドラッグクィーンが存在が自らの地道なそれまでの活動で獲得してきたものを台無しにすると、激しく憤っている者もいる。

“You know, man. Gay Pride Week? Every year. To celebrate 1969 when those drag queens threw their purses at the New York police. Cliff was always in that parade up to his *ano*. But why celebrate drag queens? They spend their whole life celebrating. They don’t do nothing but make the rest of us look bad.” (④—p.62) (「分かるだろう。ゲイプライドパレードウィーク。毎年だ。ドラッグクィーンがニューヨーク警察にバッグを投げつけた 1969 年を祝うために。クリフはいつもそのパレードをすっかり楽しんでたよ。でも、なんだってドラッグクィーンを祝うんだ。どうせ彼らはずっと祝っているじゃないか。残りの我々がひどく見えるようにする以外何もしないんだから」)

“Then, all of a sudden, here came the clowns. Calliopes, elephants, performing seals. The television people went mad. Naturally. I mean, anyone making a total ass of himself is bound to raise ratings. And everybody always knew homosexuals were a bunch of overgrown little girls painting their faces and getting themselves up in mommy’s best organdy. What more could the media ask for? Never a five-minute serious discussion. But screaming queens?” (④—p.72) (「それから、突然、道化師が登場だ。蒸気オルガンだ、象だ、芸をするアザラシだってね。テレビ局の輩は喜んだよ。ばかげたことをするやつが視聴率をあげる。みんな分かっているしね。ホモセクシュアルは顔を塗りたくって、ママのベストのオーガンジーのドレスを着ている体だけは大きくなった女の子の集まりだって。これ以上メディアが望むことがあるかい。5分間の真剣な討議なんてあり得ない。でも叫んでいるクイーンならよいというわけだ」)

偏見を持つ側が簡単にその正体を現さないこともある。5 作目、*Skinflick* (1980)での殺人事件の被害者は、反同性愛、反ポルノ運動のリーダーである。敬虔なクリスチャンの聖人君子と周囲には思われていたが、実際は、熱狂的狂信者にすぎず、秘密裡には少女と関係を持ってロリコン願望も満たす偽善者でもある。ホモやポルノを糾弾する方法は異常なほど暴力的であり、自警団を作り、法を犯すような過激な方法で風紀を取り締まっている。

The straights went after the vigilantes when they ripped down the bushes in the park. Pensioners. Housewives with kiddies. They ruined their park to keep the fags out of the shrubbery at two in the morning. At two in the morning, who cares what’s in the shrubbery? And they couldn’t nail them. So what can us pre-verts and smut peddlers expect?” (⑤—p.20) (「公園の茂みを刈り取った時は、ストレートの人だって自警団を非難したわね、年金生活者や子どものいる母親達がよ。彼らは朝の 2 時にホモが茂みに入り込まないようにするために公園を破壊したわけ。朝の 2 時よ。誰が気にするの。誰の迷惑にもならないわ。結局彼らは逃げ切ったわけだけど、私達のような汚らわしいポルノ雑誌の売人に出来ることはないわね」)

“those creeps are hypocrites, you know?” (⑤—p.21) (「あの気持ち悪い奴らは偽善者、そうよね」)

前述の「ミステリーマガジン」で、評論家の田川が、シリーズ全編を通して社会問題を扱う社会派といえるが、そうした問題を声高に描くのではなく、むしろ目立たないようにしていることを指摘している<sup>⑥</sup>。そして、殺人はミステリーのストーリーラインの中で必然的なものとして出現し、「殺し」も現実の矛盾があらわれた結果として登場する、探偵がそれを解決しようとすれば、その矛盾に遭着せざるをえない、というように、物語が論理的に読者に納得できる流れを維持して

⑥ 田川律「もっとも現実に近いフィクション」『ミステリーマガジン』No.410, p.52

いるがゆえに、殺人のおこる物語がリアルなままで存在できると評価している<sup>7)</sup>。

さらに、前述の 1979 年のエッセイ中のハンセンのインタビューの言葉を紹介し、ミステリーでの殺人がリアルであり続けるためには論理的に理由の説明がつく殺人が必要であることをハンセンが冷静に考えていたことを紹介している。

「ミステリーではしばしば安易に殺人が起こり、茶の間に死体がごろごろ転がることも、ごく普通だ。しかし、現実の世界ではそんなことはありえない。としたら、フィクションとして書かれるミステリーでも、当然殺人が起こるとしたら、読者も納得できる理由が必要だ」<sup>8)</sup>

ジジェクが、『斜めから見る』の中で、リアリズム小説の没落時と、探偵物語が「論理と推理」の探偵小説に取って変わられた時期が同じであることを以下のよう示唆している。時期が同じであることについての論理的な説明というのはないけれど、少なくとも、同じ形式的問題を抱えている—「出来事の『実際の』連続を表現すること、すなわち直線的に一貫して物語を語ることが不可能だという問題<sup>9)</sup>」。それを探偵小説においていうなら、殺人を一人の人生の物語の中に、「人間の意味ある全体性の中」に位置づけることはできないということである<sup>10)</sup>。探偵小説では、殺人という暴力性に満ちた行為の理由も行為者も分からない中を、探偵が解明に向けて、答えを一つずつ得ていくことで、物語は終わりに向かう。ジジェクはこう説明する。

探偵小説にはどこか自己反省的な緊張感がある。探偵小説とは、物語を語ろう、つまり殺人の周囲および前に「本当は何が起きたのか」を再構成しようとする探偵の努力の物語であり、したがって探偵小説は、「誰が殺ったのか」という問いにたいする答えが得られたときに終わるのではなく、探偵がついに「真の物語」を直線的な語りによって語ることができたときに終わるのである。<sup>11)</sup>

ブランドステッターは死亡保険に関わる調査員であるから、死が必然的に物語に存在する。説明ができないような不審死が存在することも不思議でない。そもそも死そのものが、ラカンがいうところの現実界なのだ。そして、社会の現実の抱

<sup>7)</sup> ウィン, pp.52-53.

<sup>8)</sup> 田川, p.53.

<sup>9)</sup> ジジェク, スラヴォイ 鈴木晶 (訳)『斜めから見る』青土社, 2014年, p.99.

<sup>10)</sup> ジジェク, p.115.

<sup>11)</sup> ジジェク, pp.99-100.

えている矛盾がリアルであればあるほど、死を導いてしまうような理由も生まれてくるのだ。そして調査をするブランドステッターがその理由を探ることで、最後には直線的な語りを手に入れるのである。

2004年、*Face Out* がウィスコンシン大学出版社から再版されたが、それにはハンセン自身が寄せた8頁にわたる「前書き」がついている。2004年11月にはハンセンが死去したことを考えると、2004年2月付「前書き」は、シリーズに関しての作者の最後の発表文書である可能性が高い。そこには1970年の第一作刊行までの作家人生と経緯、そしてシリーズへの想いが記されている。同性愛者について異性愛者に正しく知ってもらおうという目的達成のために、異性愛者の読者が読み続けてくれる類の物語に同性愛者を入れ込むことを考えた時、探偵小説ほど相応しいものはなく、それが探偵小説というジャンルを彼が選んだ理由だとしている。

When I sat down to write it, an old awareness was nagging me, that gay men already knew what I had to tell them. How could I reach straight readers, introduce them to those strangers they'd crossed the street to avoid meeting all their lives? By putting them into the kind of story that keeps readers turning pages. And nothing does that better than a detective novel. And that's what I wrote. (①—p.ix)

(私が執筆をしようとした時、前々から気づいていたこと、つまり、同性愛者はすでに私が言わなければならないことを知っているということが私を悩ませていた。どうしたら異性愛者である読者に届き、彼らが一生を通して会うのを避けようと通りを渡ってきた、そうした同性愛者という「見知らぬ者」を紹介できるのだろうか。彼らを読者が頁を進めたくなる類の物語におくことによって。そして探偵小説ほどそれをうまくやるものはない。そして、それが、自分が書いたものとなったのだ)

## 2. 80年代の同性愛者とエイズの描かれ方

1987年、シリーズ9作目になる *Early Graves* は、エイズを主要なテーマにして物語が展開する。同性愛者のエイズ患者の連続刺殺事件が起こっている中、ブランドステッターは一人の若い実業家の刺殺事件を調査することになる。この実業家も実は同性愛者だと分かり、真相解明のために、連続殺人事件の被害者達について聞き取り調査が必要になる。聞き取りをする中で見えてくるのは、1980年代後半、同性愛者とエイズを同一視している社会の様相である。ミステリーに必要な殺人事件と同じく必然といえる解明の過程を描いて、物語は自然に当時のエイズ感染と同性愛者の置かれている状況を精緻に描きだしているのである。社会の同

性愛者への偏見も単純なものではない。当時の一般的な大衆の持つ知識と同性愛者への偏見が強く結びついている様、公権力を持っている者の側の無理解、エイズについて知識があることが必ずしも偏見の行動を止めることに繋がらないという事実、家族に見捨てられ孤立する同性愛者、教会の慈善活動と宗教の無理解や限界、同性愛者の異性との結婚、同性愛者の男性から罹患する女性と、一つとして単純な物語はなく、エイズが複層的に人々の生き方に影響を与えている様が描かれる。事件の真相にたどり着くために聞き手となっているブランドステッターと同じく、読者も一緒に聞き手となって耳を傾けることになる。以下、そうした例を示していきたい。

殺されたのはエイズ患者の兄アート。兄の世話をしていた彼女もまた同性愛者で、エイズ罹患の兄を引き取ったことで、セクシュアリティに無理解な親とエイズを恐れているパートナーの両方を失うことになる。

“The police will do nothing. What do they care? He was only a faggot. Worse than that, he had a disgusting disease from doing disgusting things with his sex. They are happy Art is dead. They wish all faggots were dead.” (⑨—p.40) (「警察は何もしてくれないわね。何を気に掛けることがある？ 兄さんはホモに過ぎない。それ以下よね。あんな胸が悪くなるようなことをしてぞっとするような病気になったわけだから。彼らは嬉しいのよ。アートが死んで。ホモは死んでくれたらと思っているのだから」)

“I lost Anita, I lost Art, and because I would not let him die cold and starving in the streets, I lost my mother and father, too. AIDS was God’s punishment on Art, and because I took him in, God had damned me too, right, and they don’t speak to me no more.” Her laugh was sad. “But that would have happened, anyway. They are going to guess the truth at last—that I’m gay too.” “That I will never give them grandchildren. (⑨—p.43) (アニータを失った。アートも失ったわ。そして、アートを通りて寒さの中飢えて死なせなかったからって理由で、両親もね。エイズはアートに対する神罰なのね。私が彼を引き取ったから、神は私もそうしたの。両親は私と話そうとしないのよ」悲しい笑いだった。「どちらにしても、いずれ起こったことなのよ。今に私も同性愛者って真実が分かったらうから」私が彼らに孫を見せることはないってね」)

子どもの頃は父親に女々しいと暴力をふるわれていた青年ビューが事件の被害者である。そんな父親でも彼は面倒を見ていたが、父親はビューがエイズになった途端見捨てて出ていき、窮状を見かねた叔父が彼の面倒を見ていた。「問題を持つ」ことへの理解と「問題」自体への無理解、その両方を持ちながらである。

“He had his troubles, being so, well, like a girl? From a little child, you know—it made things hard for

him with the other children. Poked fun at him, hit him. Lost his mama early too. That made it worse. His daddy tried to beat it out of him. Mason would never hit Dandy—that his dog. Just the boy. And I was the one Billy run to. I let him cry to me. I was kind to him. Why not? Wasn't his fault. God made a mistake, is all—put a girl in a boy's body? (⑨—p.61) (「彼には問題があったんだ。女の子のようなね。小さい時から、他の子どもといることを難しくさせた。彼をからつかたり、叩いたり。母親も幼い時亡くして、それも悪かったんだ。父親は叩き直そうとしたよ。メーソンは自分の犬のダンディは絶対殴らないのに、子どもにはするんだ。俺はビリーの味方だった。泣くのも付き合ったんだ。優しくもした。だってそうだから。彼の落ち度じゃない、体に女の子がいてある、それだけなんだ」)

“All he was afraid was AIDS.” (⑨—p.63)

殺されたのはシェーンという青年。残された恋人も今は彼から感染したエイズで死の床にいる。愛するシェーンからエイズをうつされたとは信じたくない恋人は、彼と出会う前、昔自分が持った他の関係からうつったのだと言い続ける。シェーンこそがそうした他の関係を持っていた人物だと誰もが知っているけれども。

‘It wasn't Sean gave me AIDS. It was somebody a long time ago, years ago, when I thought I should live like Sean, and I went with maybe a dozen boys. But it was then I got AIDS. It stays inside you, waiting.’ He looked at me, tears running down his face, shaking his poor head on the pillow, like a skull. ‘It wasn't Sean,’ he kept saying. ‘I just know it wasn't Sean.’ ” (⑨—p.72) (「シェーンが僕にエイズをうつしたんじゃない。昔付き合った誰かなんだ。何年も前に。シェーンみたいに生きるべきだと思っていた時、何人もと僕は出かけてしまった。そしてエイズになったんだ。それがずっと体の中にいたんだよ」涙を流しながら、枕の上で骸骨のような頭を振りながら、「シェーンではないんだ」そう言い続けた。「シェーンではないって僕には分かるんだ」と。)

同性愛者のカップルが、そのことを隠して家を借りている。エイズになった片方が連続殺人事件の犠牲者となる。事件がニュースになって、同性愛者のカップルだったと分かる。残された方には失った者を悼む時間はない。大家は豹変し立ち退きを迫り、加えて罵詈雑言を浴びせる。訪ねて行って聞き取りをするブランドステッターに、彼は、引越しの片付けをしながら、「タイム」最新号のエイズ特集について話す。

“The cover story. Dammed good. But it's mostly about this lovely young Latino woman dying of AIDS. Contracted it from a bisexual lover seven years before she met her present husband. Beautiful, tragic young woman, right? Right?” “Who really had AIDS? Gays, that's who. But they get shoved away inside the story, don't they? You just know the fact he had to mention who the ones are dying like flies from AIDS. Not pretty young women. Nasty, nasty gays.” (⑨—pp.73-74) (「雑誌の特集記事はよかったよ。でも、ほとんどがエイズでなくなった美しい若いラテンアメリカ系アメリカ女



性のことだったね。今の結婚の7年前バイセクシュアルの恋人からうつされたんだ。美しい、悲劇的な女性、そういうことだよね」「でも誰がエイズなんだい。ゲイだ。でも、その物語の中では取り除かれたわけだ。エイズでハエのように死んでいつている者は誰かを言わなければならないということとは分かるよね。きれいな若い女性ではなくって、気持ちの悪い、いやなぞとするゲイだってね」)

大家がやってくる。エイズに対する偏見に満ちた言葉を浴びせ続ける。

“Spread a deadly disgusting disease through a house he rents from a decent, innocent person, and never says word one. Not word one.” “Not brave enough to come out from the start and say what you and Frank Prohaska were to each other, oh, no, “We’s just bachelors,”” (⑨—p.74) (「まともで罪のない人間から借りた家に命取りの嫌な病気をまきちらしちゃって。一言だって言わなかったんだから。「自分とフランク・プロハースカがカップルだって、最初からきちんと告げる勇気もなくて。『独身の友達というだけ』なんて言ってね」)

その場にいるブランドステッターにも話しかける。

“Do you know what he is?” “That’s complicated question,” “Nothing complicated about it,” she said. “A pervert—that’s what. And Frank dying of that-that-filthy, slimy disease. (⑨—pp.74-75) (「彼が誰だか知っている?」「これは難しい質問ですね」「難しくなんか無いわ」と彼女。「性的倒錯者—それなのよ。そして、フランクはその汚らしい、いやらしい病気で死んだんだわ」)

“That’s complicated question.”—ブランドステッターの皮肉には全く気付かない大家。  
彼女のあまりの豹変ぶりに、青年は言い返さずにはいられない。

“You love our barbecues,” “You and old Brad. All those free wine coolers. Sunday after Sunday.” (⑨—p.75) (「僕たちのバーベキュー、お好きでしたよね。ブラッドさんもあなたも。それから無料のビールも、毎日曜日でしたよね」)

しかし、彼女にはそうした皮肉は通じない。

“I want to throw up when I think of it, she said.” “I ought to report you to the health department. I ought to call the police and have you locked up.” She waved the mop in his face. “Get out. Get right out of there this minute, (⑨—p.75) (「ああ、考えたら、吐いてしまいたいわ」「保健省にレポートしなくて。警察を呼んで、あなたはぶち込んでもらわないと」彼女はモップを彼の前で振り回した。「出ていきなさい。すぐにここから出て」)

大家の言葉に怒りながらも、同時に、ブランドステッターに吐露する本音。

“We were. Really. Backyard barbecues and all, I mean, what faggot do you know who doesn’t, in his heart of hearts, want to be just like Mr. and Mrs. Joe Doaks next door?” His voice wobbled again. He stabbed out the cigarette in a little tin ashtray. “Damn. We had time coming to us.” (⑨—p.77)



(「僕たちはそうなんだよね。確かに。裏庭のバーベキューにしろ、何にしろ、心の中では、隣のドークス夫婦のようにになりたいと思わないホモがいるのだろうか」彼の声は震えた。小さな灰皿にタバコを突き刺した。「畜生。僕たちは終わりが来てしまったんだ」)

一時的に両親の家へ避難するが、その両親が同性愛に理解があるわけではないのだ。愛する者を失った悲しみ、痛み、後悔、屈辱、そして、将来に続くであろう無理解。

“Your parents will be some comfort to you.” “Are you kidding? They don’t know about me. Luckily, the TV news ignored me when Frank was killed. My parents never even knew Frank and I lived together. When I simply had to have them over, he’d take all his stuff and hide out at a friend’s.” “Explain,” Dave said. “Give them a chance to help.” “Be serious,” Rogers said, and started the truck. (⑨—p.79) (「両親が慰めてくださるよ」「冗談だろう。僕について知りもしないんだ。幸運にもね。フランクが殺された時、僕のことはTVニュースがほっといてくれたから。両親はフランクと僕と一緒に住んでいるのも知らなかったよ。家に彼らが来る時は、フランクは全部持ち物をもって友達のところに行ったんだ」デイブは言った「説明してみたらいいじゃないか」「助ける機会を与えるんだ」「冗談はやめてくれ」ロジャーズはそう言って、トラックをスタートさせた。)

捜査の過程で訪れる必要があった教会のエイズ患者の救済センター。宗教が同性愛者の患者を慈善として救い、その宗教が同性愛を拒絶する、矛盾し合う現実。

Youth Outreach of Our Savior’s Church Hollywood. On the sidewalk below the sign, a lanky young woman used a roller to try to paint out graffiti—FAGS CAUSE AIDS KILL ALL FAGS. “This is the fifth time in two weeks,” she said. “It isn’t hatred, not really. It’s fear.” “Those two keep close company,” Dave said. (⑨—pp.88-89) (「ハリウッド教会若者救済センター」—このサインの下の歩道で、ひょろっとした若い女性が落書きを消すためにローラーを使っていた。「ホモがエイズの原因だ。ホモを殺せ」「2週間で5回目なんです」と彼女は言った。「憎しみじゃないのですよね。本当は恐怖なんです」「その二つはいい仲間ですよ」デイブは言った。)

“We’re Protestants. Rome is still nervous about homosexuality. We got over that in the sixties. It caused an awful ruckus, but charity won out in the end.” “Not all Protestants, of course. Our denomination, and a few others. No, no.” “Not the evangelicals. Talk about hatred how that bunch can hate. It’s ignorance, you know. Just ignorance.” (⑨—pp.88-89) (「私達はプロテスタントです。ローマ法王は同性愛にはまだ神経質です。私達は60年代に克服しました。ひどい騒ぎになったけれど、最後は慈善が勝利したわけです」「プロテスタント皆がそうだというわけではありません。もちろん。私達の宗派と、いくつか。あとはだめ」「福音派はだめですね。あの人たちが憎むことができることといったら。無知ですよね。ただ無知」)

彼は被害者でなく、連続殺人事件の殺人者、そして同性愛者。エイズで入院、退院後、職場に居場所はないことを知らされる。エイズはうつらない—その事実を雇い主は「私は分かっている」という。でも「分かっている」から人が理解を

示す行為をするわけではないのだ。立ち去るしかなく、彼は時を経ず、路上生活者となる。

“I know that. But Personnel says you have AIDS. We have to protect the rest of the staff.” “From what? I don’t have sex with them. God forbid. Would anyone? Have you looked at them? Mr. Selwyn—that is the only way they could get AIDS from me.”

“I know that,” he said, “but not everyone believes it. If you don’t go, they will. We can’t afford that. We also can’t afford the group insurance rates we’ll be slapped with if you stay. Would that be fair to the others?” (⑨—pp.106-107) (「私は分かっているよ。でも人事部が君はエイズだと言っている。残りの従業員を守らないといけないんだ」「何からです。私は彼らとセックスはしませんよ。あり得ないんだ。誰がしますか。彼らを見てください。セルウィンさん。彼らが私からエイズをもらうのはそれだけでしょう」「私は分かっている」彼は言った。「でもみんながそう信じているわけじゃない。もし君が去らなかつたら、彼らが去る。それは困るんだ。団体保険だって、もし君がいたら大変なことになるだろう。他の人にそれは公平といえるかい?」)

彼は、手記に同性愛者であることの孤独を綴る。

The worst thing about being gay is it is risky to try to find somebody to love. Straights have it easy. Any idiot can tell the difference between a man and a woman. You don’t have to go circling around some stranger you find attractive, trying to guess if they’re gay, scared you’ll give yourself away to someone who’ll spit on you if you’re wrong about them, or will tell everybody you’re queer. No wonder gays give up after a while. They settle for sex where it’s easy to find. Nobody in the streets, parks, baths, bars has the patience or the courage after a while to risk getting beaten up. They go where they know everybody else is like them. (⑨—p.109) (同性愛者である最悪のことは、愛する誰かを見つめようとするのが危険なことなんだ。異性愛者は簡単だ。どんなバカだって、男性と女性の違いは分かる。魅力的な人に出会って、同性愛者だろうかって推測しながら、もし間違っていたら自分につばを吐きかけるような、また、みんなに同性愛者であることをばらすような人物に告白してしまったらって、恐れて、周りをうろろろする必要がないのだから。同性愛者があきらめてしまうのも無理はない。殴られるような危険を冒したあとでは、見つけることが簡単なところのセックスで妥協するんだ。みんなが自分と同じような場所に行くんだ。)

ブランドステッターが捜査を依頼された実業家の妻は、死亡した夫が実は同性愛者であったこと、また秘密に交際していた相手からエイズにかかっていたことを知る。そして彼女もまた夫からエイズ感染したことを知るのである。

Her laugh was brief and bitter. “I believed whatever Drew Dodge told me. Then, I learned bitter, didn’t I, but till it was too late. He lied all the time, damn him.” “His whole life was a lie.” (⑨—p.158)

(乾いた、短い笑いだった。「ドリュー・ドッジが私に言ったことを全部信じました。苦い学びでしたね。遅すぎました。ずっと嘘をついていたのです。ひどいことです」「彼の人生そのものが嘘だったのです」)

刊行された 1987 年当時、エイズは「同性愛者の男性が性行為によって罹患するもの」という社会の偏見が最も一般的に広まっていた。エイズについて持っている人々の知識には違いがあり、恐ろしい伝染病のようにそばにいてうつると恐れている者もいれば、同性愛者以外にも性行為でうつることを分かっている者もいる者もいる。それでも、雑誌の特集では、同性愛者の男性にうつされた女性についての話が同情をもって大きく扱われる、様々なデマと事実の報道が入り混じっている時期、それまでも存在してきた性的少数派への偏見が何十倍にも大きくなっている、そうした社会で生きる同性愛者にはまさに過酷な時でもあった。同性愛者への正しい理解をしてほしいというのが 1970 年開始のシリーズの始まりのハンセンの願いであったことを思うと、そうした時期を生きる同性愛者とエイズについて、ハンセンが「正しく」レポートしようとしたのは疑いがないであろう。被害者も殺人者もエイズに罹患した同性愛者という設定で、同性愛者は被害者にも加害者にもなり得ることを示唆し、事件の真相を解明する過程で、セクシュアリティ、病、偏見という問題を次々に問いかけて、読者にリアルに社会の矛盾を感じさせることができるのである。筆者には、もし 1987 年に自分がこの作品を読んでいたらどのように思えたのかを推測してみることしかできないゆえに、その時代にこの本を読んだ評論家の田川の言葉を引用してみたい。

「じっさい、さまざまな人が、さまざまな角度から、この問題を論じているが、ぼくが目にしたかぎりでは、この作品の、ハンセンのエイズについての捉え方が、誰よりも説得力があった。」<sup>12)</sup>

筆者がシリーズ全作品を読んだ 2020 年の春、出来事は「歴史」になっていた。これが 1987 年刊行のミステリー作品だったと考える時、ハンセンの冷静な筆致、—それはブランドステッターの示す冷静さでもある、は傑出していると感じる。ハンセンの目的が同性愛者を描くことであり、主人公のブランドステッターは同性愛者であるという点で、この回は、いつも以上に作家が感情移入をしてもおかしくないが、これまでのシリーズで彼が保ち続けている冷静さは失われることなく、いつも通り静かに真相を解明していく。一番大事なのは、最後に真の物語が

---

<sup>12)</sup> 田川, p.53.

見えることといわんばかりである。だからこそ、このブランドステッター・シリーズは、1970 年開始時の同性愛者を主人公にするミステリーという異色さを超えて正統派のミステリーとして多くのファンを得たのだとは分かるのである。

### 3. 同性愛の主人公像と影響

ブランドステッターは、性的少数派であることを淡々と受け入れ、社会の偏見を苦にすることなく、自分らしい生を普通に生きている人間である。同性愛者であることを普通に生きている感が 1970 年に非常に新鮮であったことは容易に想像できるし、2020 年に読んでも、彼のもつ普通さなるものは読者に伝わる。しかし、同性愛者の自らの生を当たり前に普通に生きている彼が、かといって事件で遭遇する同性愛者への人々の偏見に沈黙しているというわけではない。彼は静かに、でも毅然と間違いを糾すのである。同性愛者を普通に生きることと、同性愛者への偏見を見過ごすことは違うのであり、それゆえに彼はヒーローなのである。

以下、一作目の *Face Out* (1970) からである。殺されたオルソンは同性愛者であった。長年連れ添った夫人は裏切られた気持ちを持ってはいるが、その彼女も夫が人気番組をもっていたラジオ局の社長マクニールと逢瀬を重ねていたのである。

“They’re all alike,” McNeil said. “No guts.” “I’m sorry about your bad luck with your son,” Dave said. “But you don’t want to let it short-circuit your brain. Olson had guts.”  
 “Not enough to knock Chalmers down and take those pictures away from him.”  
 “Knocking people down doesn’t occur to everybody as a way of solving problems.” “It doesn’t occur to faggots,” McNeil said. “I can name you a welterweight faggot who beat an opponent to death in the ring a couple of years ago... But I’m interested in your philosophy. Does it extend to guns? Are they another problem-solving device you endorse?” (①—p.170) (「みんなあいづらは同じなんだ」とマクニールは言った。「勇気がない」「あなたの息子さんの不運(※マクニールの息子は同性愛者で、マクニールはそれを憤っていた)はお気の毒ですが」デイズは言った。「しかし、だからといって短絡的なことは言えませんよ。オルソンは勇気がありましたからね」「チャーマーを殴り倒して、写真を取り返さなかったじゃないか」「殴り倒すのが、問題解決の方法だとみんなが思うわけではないですよ」「ホモにはおきないんだろうな」マクニールが言った。「私は数年前リングで相手を殴り殺したホモを知っていますがね。今はあなたの哲学に興味があります。それは銃に繋がるのですかね。それが、あなたがいいと思う問題解決の別の方法ですかね」)

He was great, wasn’t he, as long as he was making a mint for you? But when he turned out to be queer, and a murdered queer at that, very possibly murdered by another queer... then he wasn’t a friend anymore, a husband anymore. He was just another corpse, like some dead wino in a skid-row doorway.” (①—p.172) (「彼はすごいやつだったわけだ。あなたにお金を儲けさせてくれる間はず。

しかし、彼がホモと分かったら、しかも、殺されたホモ、それもおそらく別のホモに殺されたホモ、と分かったら、彼はもう友達でもないわけだし、夫でもないよね。彼はただの死体に過ぎない、スラム街の出入り口で死んだアル中のようにね」]

第3作の *Troublemaker* では、ゲイ・バーの経営者、同性愛者である男性の死亡事件から調査は始まる。著名な建築家トム・オーウェンズは同性愛者で、そこで居候をしている若者がオーウェンズの同性の恋人について言う。

“A hustler. The kind that peddles sex to perverts.” “You’re eating Tom Owens’s food,” Dave told him. “Sleeping under his roof. That’s a hell of a word.” The dark boy flushed. “Okay. Homosexuals, gays—whatever you want. I’m sorry.” (③—p.140) (「彼は売春婦だよ。性欲倒錯者にセックスを売るね」「君はそのトム・オーウェンズの食べ物を食べているんだよね」デイブは言った。「彼の家に泊まらせてもらって。それを思うとすごい言葉だね。」その浅黒い少年は顔を赤らめた。「わかったよ。じゃあ、ホモセクシュアル、ゲイだ、お好きなように。悪かったな」)

シリーズを通して、ブランドステッターが自身の同性愛について向けられた言葉に反駁するようなシーンは滅多にない。彼はその必要がないのだ。まさに当たり前のように普通に同性愛というセクシュアリティを生きているからだ。だから、以下の例はシリーズでも珍しい例である。第一作にそれはある。大きな保険会社を一代で築き上げた父親は若い女性との結婚を何度も繰り返している。その彼とのやり取りの中で、結婚して落ち着けばいいのにと父親がブランドステッターに言う。そしてその延長で放った言葉は見事に切り返される。

Why be a middle-aged auntie if you don’t want to?” “Did I say I didn’t want to?” (①—pp.100-101)  
 (「お前はなんでなりたくもない中年のおカマになんかなっているんだ?」「僕がそうなりたくないって言いましたか」)

この同性愛者の主人公像と一連のミステリーの影響について、一例を挙げてみたい。同じく同性愛者を主人公とする人気ミステリー、ヘンリー・リオス・シリーズを書いたナーヴァは、2016年の1巻の改訂版 *Lay Your Sleeping Head*<sup>13)</sup>の「後書き」で、彼に影響を与えた本として、二人の作家の作品を挙げている<sup>14)</sup>。一つがこのブランドステッター・シリーズである。第一作目の *Fadeout* (1971) を、1976年か

<sup>13)</sup> Nava, Mikael *Lay Your Sleeping Head*, Korima Press, 2016

<sup>14)</sup> ここからの1頁半は転載（一部修正）である。『『虚構世界』と『現実世界』：小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (13) 語り直された物語、*Lay Your Sleeping Head* の意味すること—』英語英米文学論集 第29号 2020, pp.65-96.

77年に読んだというナーヴァは、物語が、ブランドステッターが彼の長年のパートナーを失って6週間後に始まり、一時は自殺さえ考えるような状態で激しい喪失感を感じながら、不幸な死を遂げた恋人を想う場面で、その恋人が、ロッド、つまり「男性の恋人」であると分かった瞬間、興奮したという<sup>15)</sup>。当時の社会状況と自分の気持ちを以下のように説明している<sup>16)</sup>。その頃、同性愛者であると知ってナーヴァを雇用するような法律事務所は米国には皆無であり、同性愛者だと知って部屋を貸すような大家もなかった。男性との性行為によって刑務所に入れられるようなことがほとんどの州で起こっていたのである。アメリカ精神医学会は、1973年に同性愛は精神病ではないと認め、1974年にカリフォルニア州はソドミー法を廃止してはいたが、当時、同性愛者は、一般には完全なアウトロー的存在であり、病気で、罪深く、犯罪者、と広く見なされていた。その中でナーヴァは精神的に非常にストレスを感じていたのである。

ナーヴァによれば、その当時のゲイ文学では、ポスト・ストーンウォール文学なるものが広まっており、もてはやされているのは自らを「解放する」類のものであり、薬物を摂取し、ダンスクラブへ繰り出し、感情抜きでセックスをし、目に見える形で所属するコミュニティを持たない、そんな不運な自己嫌悪に満ちた同性愛者であった。高校生の時のナーヴァが、市立図書館で一目を忍んで同性愛についての本を探していた時、そこで見つける本のほとんどは、同性愛者を、大都会に住む、やせた派手な白人で、女装し、公衆トイレでセックスをする、そのように描く心理学のテキストだった。一方、それからすると、1970年代半ば、ナーヴァが大学生の頃出合ったゲイ文学は怖いぐらいに進化していたけれど、これらほど彼の人生や願望からかけ離れているものもまたなかったのである。ナーヴァは、その中で、自分が同性愛者だからといって、自己嫌悪でいっぱいになることも、または隠遁して生きることも、その両方とも拒んでいた。その時出合ったのがハンセンの本であり、それが意味したことを、「私の夢と願望を正当と認めてくれたもの」と謝意を示している<sup>17)</sup>。そのシリーズの主人公、ブランドステッタ

<sup>15)</sup> Nava, Michael "Afterword: The Making of Henry Rios," in *Lay Your Sleeping Head*, 2016 pp.217-218.

<sup>16)</sup> "Afterword: The Making of Henry Rios," p.218.

<sup>17)</sup> "Afterword: The Making of Henry Rios," p.219.



ーはナーヴァがなりたい自分をまさに投影できるものとなる。

Brandsetter was the kind of grown-up I could imagine myself becoming: a competent professional who was also unapologetically gay and who demanded to be respected on both counts. For me, Joe's novels were the fiction of gay liberation.<sup>18)</sup>

(ブランドステッターは私自身がそうなることを想像し得るような大人であった。有能なプロフェッショナルで、紛れもなく同性愛者でもあり、その両方の点において尊敬を要求している。私にとって、ジョーの小説が、ゲイリベレーションのフィクションだった。)

1980年代、まだインターネットが登場しておらず、ナーヴァが自著の最初の出版をしようと努力していた時期、メディアの同性愛者の描写というものは、存在しないか、または軽蔑や非難であるかのどちらかであり、本が同性愛者の物語やあるがままの人生を伝えるための唯一の手段だったのである<sup>19)</sup>。そう記すナーヴァは、その時の同性愛者の典型的な「本棚の本」についてこのように記している。

Every gay man I knew had his half-shelf of the same gay novels, from New York writers like Andrew Holleran and Edmund White, San Francisco's Armistead Maupin and the Brandsetter books of Joe Hansen as well as the classics like Gore Vidal's *The City of the Pillar*, Isherwood's *A Single Man* and John Rechy's *City of Night*.<sup>20)</sup>

(私が知っている同性愛者の男性は、本棚の半分が同じゲイ小説で埋まっていた。ニューヨークなら、アンドリュー・ホラーラン、エドモンド・ホホワイト。サンフランシスコなら、アミステッド・モーピンやジョセフ・ハンセンのブランドステッター・シリーズ。そこに、ヴィダールの『*The City of the Pillar*』、イシャウッドの『*A Single Man*』、そして、ジョン・レチャーの『*City of Night*』といった古典的な作品だ。)

実際、ブランドステッターが自分のヒーロー像になったというナーヴァのシリーズとブランドステッターのシリーズの共通性は多い。どちらも、同性愛者の主人公が事件の解明をする探偵である、探偵は人間味のある魅力的な人間である、そして、ミステリーで事件の解明を通して主人公が社会の矛盾を問うというロマン・ノワールの作品である。一方、相違点もある。まず、ブランドステッターは性的少数派であることについて苦悩する様子を全く見せない。偏見に気付き、生きづらさも経験している「はず」だろうけれど、それは「はず」のままで描かれているのである。ハンセンは、シリーズの最後までそれを通す。一方、リオスは

18) "Afterword: The Making of Henry Rios," p.219.

19) "Afterword: The Making of Henry Rios," p.232.

20) "Afterword: The Making of Henry Rios," p.233.

ブランドステッターと違って、内面の葛藤を示すのである。ブランドステッターが三人称で語られる物語で、リオスが一人称で語られる物語であることが、主人公の内面を吐露する度合いがリオスの方がはるかに多い理由ではあろう。そもそも、ナーヴァがリオスの内面の開示を増やすために、一人称で語られる物語を選んだということなのだ。

上述の相違とも関係してくるが、真実を追う二人の正義の掲げ方も大きく違う。7作の既刊シリーズ、そして2016年の一卷の改訂版、2019年の新2巻も含めて、リオスは自分が正義を求めていることを、言葉でも態度でも何度も何度も示し続けている。一方、ブランドステッターは12作を通して、正義がそこに存在することは読者に分かって、言葉によって読者が確証を得ることはたった一回しかできないのである。それが、第8作にある。すでに請け負った仕事の範疇を超えて、身の危険も迫っている中、ブランドステッターは事件を追うのをやめない。恋人セシルは彼の身を案じて止めようとする。

“Dave, why are you doing this? You’re not getting paid. Lovejoy called you off the case. You want the truth? You’re compulsive. You can’t leave it alone. You’re like Adam Streeter, you know that? You live for danger.” “I live for justice,” Dave said. “Justice is a dream,” Cecil scoffed, “a romantic ideal. Who the fuck gets justice in this life? The people living on the street?” “His laugh was angry. “Or shall we consider the black people in this country? What the hell did they do?” (⑧—p.125) (「デイク、なんでこんなことをするんだ？もう支払いもされてないだろう。ラブジョイは依頼を取り消したよね。真実が欲しいのかい？取りつかれているよ。ほっとけないんだ。アダム・ストリーターのようだ。分かるだろう。危険に生きる」「正義なんだ」デイクは言った。「正義なんて夢物語だよ」セシルは非難した。「ロマンティックな理想だ。この世で誰が正義を得る？ホームレスの人々かい？」笑っていたが怒りがあった。「それともこの国の黒人かい？彼らは何をした？」)

ナーヴァに対するブランドステッターの影響はプロットの立て方にも見られる。一作目のブランドステッターの恋人の死後に物語が開始されるというプロットは、ヘンリーが恋人ヒューの死を物語の開始からほどなく迎えて、それから本格的に物語が始まるというナーヴァの一作目のプロットと明らかな共通性がある。また、ナーヴァは、2019年、時系列では既刊のシリーズ2巻目の前に位置する新2巻を刊行するが、そこでは、一時的にリオスが保険会社の調査員の仕事を引き受ける。保険調査員は、ブランドステッターの仕事である。ナーヴァが影響を強く受けたというシリーズを新作にあたって意識的に使ったと考えていいだろう。



興味深いのは、ナーヴァの 2016 年の改訂版と 2019 年の新 2 巻の 2 作では、二つのシリーズが持っていた類似感がかなり消えたことである。ナーヴァ自身が、ノワールの範疇で性描写の明示を自分ができるようになったと 2016 年改訂版の「後書き」で説明しているように<sup>21)</sup>、ナーヴァは最近の 2 作品には性描写を明示している。一方、ハンセンは、シリーズ以前の作品においては、出版するために、編集者に性描写を増やすように言われたので、仕方なく入れていたという。

I had serious things to say about what it meant to be homosexual in our world and time, but if this was the only way I could get them into print, then so be it. (①—vi)

ところがシリーズ一作目には性描写はないのに編集者に受けがよく、いつものようには要求もされない、そして、そのままシリーズ作品には性描写はない形で最後まで続いたと説明している<sup>22)</sup>。作品における性描写の意義を作者がどのようにとらえたかが、固定したファンを持ち人気を得た二つのミステリー・シリーズの類似性を最後に大きく変えたのである。

#### 4. 作家と作品に書くことの関係

ブランドステッター・シリーズの一巻 *Fade Out* (1978) と最終巻 *A Country Of Old Men* (1991) には、「作家」が登場する。*Fade Out* での「作家」は事件の被害者で、作家になり損ねた人物、フォックス。*A Country Of Old Men* では、職業作家として生きたヘルマス。二人とも「作家ハンセン」の作家と作品の関係についての思いを投影していると考えられる。*Fade Out* でブランドステッターが死亡事故を調査することになったフォックスは、人気のカントリーシンガーで、美しい妻と瀟洒な家、市長選挙にも出馬という名士である。若い時は長い間作家志望であったことをブランドステッターは調査の途中で知る。フォックスの娘に彼の作品について尋ねたブランドステッターは、父親は「書きたいものを書けない」でいたという証言を得る。同性愛者であるフォックスが異性愛者として結婚をし、家族にも周囲にもセクシュアリティを隠していた事実とあわせると、彼自身が同性愛者という本質的

<sup>21)</sup> “Afterword: The Making of Henry Rios,” pp.213-241.

<sup>22)</sup> Hansen, Joseph “Preface” in *Fade Out*, February 2004.

なことを隠しているために「書けない」ことがあったのだと読者が自然に推測できるような会話が続く。

“He was a... good writer. But something was missing. I don't know what. Something, though. It was always as if he was talking about the wrong thing.” “Not what was really on his mind.”

(①—p.39) (「父は上手な書き手だったのです。でも何かが欠けていたのです。何なのかはわかりません。でも何かがあったのです。まるで彼が間違っていることを話しているような」「本当には心にないことをとということですかね」)

“He hadn't any sorrows,” she said. “Not anymore.” (①—p.39)

(「彼には悲しみはありませんでした」彼女は言った。「もはやです」)

Could that be what you meant by his writing about... the wrong things?” (①—p.40)

(「それが、彼が書いていることであなたが意味したことですか、つまり、何か間違っていること」)

その「書けなかったこと」について、かつてのフォックスの同性の恋人が言う。

“He wanted one thing. To write great novels.” “Why didn't he do it?” Dave asked. “He had years.”

“Wasted. Look at it this way. Suppose Dostoevsky had never mentioned his epilepsy, his compulsive gambling. How far would he have gotten?” (①—p.154) (「彼は一つのことを望んでいました。偉大な小説を書くことです」「なぜしなかったのでしょうか？」デイブは尋ねた。「長い月日がありましたよね」「無駄にしたんです。こう考えてみてください。ドストエフスキーが自分の発作やギャンブル狂について記さなかったら、どこまで行きつけたかってね」)

この物語でのフォックスはハンセンが避け得た作家像なのである。一節に引用した1979年のエッセイにあるように、同性愛者の生を書くことについて、「それは私がいくぶん詳しく権威をもって語れる人生の側面だし、私に向いた仕事だった。プロパガンディストではなく、嘘いつわりのないレポーターとしての仕事のことだ」<sup>23)</sup>と述べている。ハンセンのシリーズ執筆の一番の理由は普通に生きる同性愛者への理解をすすめることであり、同時に、彼はそれについてよく「知っていた」のである。そして、ハンセンは「書きたいものを書けた」幸せな作家となり得たのである。

*A Country Of Old Men*の「作家」は、ブランドステッターの高校時代の同級生ヘルマスで、元気ではあるが、それほど遠くはない死を暗示させるような老人である。

<sup>23)</sup> ウィン, p.62

ハンセンと同年齢と設定されているブランドステッターなので、ヘルマスはハンセンとも同年齢である。ヘルマスは高校時代から作家になることを夢みていたが、その後の 20 年は出版社から送り返される小説に敗北者のような気さえしている。妻が支えになってくれていることだけが救いのような日々。それでも、40 歳を迎えるまでに作家として仕事をしているようになる。ここまでのヘルマスのプロフィールは、公表されているハンセンのものと極めて極似している—ハンセンは、はやくから作家志望で、20 歳過ぎには結婚し（ハンセンと同じく、妻も同性愛者といわれている）小説を書き続ける、なかなか認められない中で、少しずつ作品を発表、そして、44 歳で発表したブランドステッター・シリーズは批評家から高い評価も得て、固定ファンも獲得し、20 年以上にわたる人気シリーズとなる。本では、このように続いて書かれている。

The books weren't the great American novels he'd dreamed of writing when he was editor of the high school paper, and used to chatter excitedly to Dave about the future. They were detective novels. But they were literate, reviewers found something elegant about them, and slowly they built him a readership. ..He was published all over Europe now, and in Japan, and his publishers kept the books in print here in the States. (12—p.9) (彼が出した本は彼が高校の新聞の編集長だった時将来書きたいと夢見て、デイブにその未来について興奮して話していたような、偉大なアメリカ文学ではなかった。しかし、それらは文学的であり、批評家は品格を見出し、読者のファンも次第につくようになった。(中略) 彼の作品はヨーロッパ中、そして日本でも刊行され、米国でも出版され続けているのだ。)

これもまたハンセンとヘルマスは同じ状況なのである。ハンセンがヘルマスに自分の作家としての思いを反映させたことは確かであろう。そのヘルマスは、今過去の出来事を入れ込んだ長編を執筆している。その作品の話をするとき、ブランドステッターとこんな会話をする。

“What would a reporter care?” Helmers scoffed. “Dave, I don’t write best-sellers.” “There’s always a first time,” Dave said. “Why isn’t this it? For decades, now, you’ve been building up a readership. You told Cecil twenty of your books are still in print. Maybe that’s not a record, but we both know ninety percent of mysteries vanish like the rose.” (12—p.87) (「レポーターが気に掛けるってことがあるかなあ」とヘルマスは笑った。「デイブ、僕はベストセラーを書いていないんだよ」。「誰にもはじめということがあるだろう」とデイブは言った。「これがそうならないって言えるかい。何十年も、君は読者を得てきたよね。セシルにも、君の本は出版され続けていると言ってただろう。これ自体は記録というものではないけれど、でも分かっているように、ミステリー小説はバラムみたいに 90 パーセントは消えるんだから」)

第3節であげた2004年の「前書き」で、ハンセンはシリーズが絶版になることなく、着実に新しい版を重ねたことが、普通の同性愛者が他の人々と同じように生きる姿を知ってほしいという自分の当初の願いを叶えたと自負している。

For the next twelve years, Fadeout and the rest of the Dave Brandsetter mysteries sold steadily in paperback, new ones added as I wrote them, and no title slipping out of print. Not only did this mean new readers every day were turning my pages to find out whodunit, but that along the way they were getting my message that homosexuals were pretty much like everyone else in this world, living as best they could, with their share of joy and sorrow, success and failure, love and loss. It doesn't sound like a startling message, does it? Yet no other mystery writer had passed it along before me. Gradually times changed. At my back, a line began to form of new writers with gay detectives, male and female. (①—x-ix) (それからの12年間、『フェード・アウト』と残りのデブ・ブランドステッター・ミステリー作品はペーパーバックで着実に売れ、書くときと新しく加わって、絶版になったものもなかったのです。これが意味するのは、日々新しい読者が殺人事件の謎を見つけるために頁をめくっているというだけでなく、それとともに、私のメッセージ—同性愛者はこの世界の他の者と同じように、喜びと悲しみ、成功と失敗、愛と損失を経験しながら生きている人間だ—を受け取っているということです。驚くべきメッセージのようには聞こえないでしょう。でも、私以前のどのミステリー作家もしていなかったことなのです。次第に状況が変わりました。私の後に、男性も女性も、同性愛者の探偵の物語が書かれていったのです。)

「書けること」と「書きたいこと」を書く—それによって創造した物語が、まさにそれゆえに、大きな意義と永遠性を持ち得たことを、作者自身が確信していたのである。

## 6. おわりに

ブランドステッター・シリーズ、全12作は、2019年、日本の片隅で私という読者を手に入れた。その時々社会問題が描かれているこのシリーズを、同時期に読めなかったことは、その時期にも読めたゆえに残念には思う。しかし、シリーズで描かれた社会の様相自体は「歴史」になっただけでも、ミステリーの解決までの巧みな展開、縦横に織り込まれた普遍的な人間の生と社会の抱える偏見、それらを理解でき得る知性を持ち、最後まで正義のために真相を究明する信念と行動を伴う探偵、これらは「歴史」となった社会問題という限界を超えて、私のような現在の読者を見出す力を持っているということだろう。何よりも、12作を一気に短期間で私に読ませた理由でもあるのだが、シリーズが進むとともに年を重ねていくブランドステッターの人生と恋の展開を知りたいという好奇心を読者に搔

き立てるのだ。ハンセンが主目的としたのは皆と同じように普通に生きている同性愛者を人々に理解させることであった。だからこそ、ブランドステッターは恋もするし、愛する者を失うこともあるし、老いも避けられないし、愛する者を残しての自らの死さえも免れない―読者がその人生を気にかけてしまうリアルな主人公なのだ。第一作が刊行された 1970 年から半世紀を経た今、確かに社会は変わったのだろう。2020 年米民主党の大統領予備選挙の序盤戦では、同性愛者であることを公表している既婚の若い政治家ブティジェッジが善戦した。しかし、一方で、当時の共和党の副大統領ペンスは同性愛を罪とみなし、矯正施設に入れることが正しいと公言する人物であった。社会は半世紀で大きく変わったし、同時に少しも変わらなかったのである。これからも続くだろう少数派への偏見と、それに一人ひとりの貴重な生が影響されることを思う時、このシリーズには作家の当初の目的を遂行し続けてほしいし、し得るだろうとも思う。前述の「ミステリーマガジン」で柿沼がこう記している。

シリーズの最大の功績は「バクストの『モラル』と『探偵の恋』という原型を踏まえながら、尊敬される一市民としての、ごく日常的なゲイ探偵像を定着させたこと」にある<sup>24)</sup>

まるで「普通」のことであるかのように同性愛者の探偵ブランドステッターに王道のロマン・ノワールの物語を徹底的に貫かせたことで、ハンセンの意図した当初の目的を半世紀後も果たせるという永遠性を得たのである。

---

<sup>24)</sup> 柿沼瑛子「ゲイ探偵の系譜」「ミステリーマガジン」No.410, p.59.



# 寄生空所構文の重心原則

杉 山 正 二

## Abstract

In this paper, I would like to reconsider parasitic gap constructions from the viewpoint of new framework of Balance Theory and claim that the less acceptability of these constructions and the reason of some ungrammatical cases can be followed naturally by our framework.

Since parasitic gap constructions are derived by wh-movement, they should be controlled by our Top-Weight Principle. This principle requires that wh element in the top position needs to keep five points as the total weight. However, wh-phrase in parasitic gap constructions is inevitable to have more than five total weight point because this wh-phrase has two traces at its deep structure. We will discuss the less acceptability of these constructions can be explained by the assumption that the total weight of wh-phrase in these constructions should be 6 point. Furthermore we suggest that true wh-trace and parasitic gap should share the same  $\theta$ -role in order to explain some ungrammatical cases.

## 1. 序 論

寄生空所構文 (parasitic gap construction) は, (1) が示すように, 一つの wh 句に二つの空所が対応する特殊な wh 疑問文を指す<sup>1)</sup>。

(1) What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> before you read e<sub>i</sub> ?

(Chomsky, 1986:64)

---

<sup>1)</sup> 以下の原典には, 痕跡 (trace), 指標 (index), 範疇 (category), 括弧 (bracket) などの表示がないものも含まれていることをお断りしておく。

ここで *e* (=empty) が表す空所は単独では認可されず、真の空所 (real gap) と呼ばれる痕跡 (trace=*t*) が存在するときのみ生じるので、比喩的に寄生空所 (parasitic gap) と呼ばれている。この構文を厄介にさせている要因の一つに、そもそも寄生空所構文が完全に容認されるわけでないという経験的事実がある<sup>2)</sup>。通常の *wh* 疑問文では、*wh* 句と痕跡のあいだに 1 対 1 の対応関係が成立するが、寄生空所構文では、痕跡が二つ存在するにもかかわらず明示的な *wh* 句が一つしかないというアンバランスが発生している。おそらくこの不均衡さが寄生空所構文のマージナリティの最大の原因だと考えられるので、この事実を反映させる分析が望まれる<sup>3)</sup>。杉山 (1999) では、バランス理論の視点から文法的な (1) と以下の非文法的な (2, 3, 4) を区別する一般的条件として (5) を提案した。

(2) \*Who<sub>i</sub> did you telephone *t<sub>i</sub>* after *e<sub>i</sub>* arrived ? (Lasnik & Saito, 1992:113)

(3) \*Who<sub>i</sub> *t<sub>i</sub>* resigned before we could fire *e<sub>i</sub>* ? (Lasnik & Uriagereka, 1988:84)

(4) \*Who<sub>i</sub> *t<sub>i</sub>* met you after *e<sub>i</sub>* telephoned John ?

(5) 寄生空所条件 :

真の痕跡と寄生空所はバランスがとれていなければならない。両者のバランスがとれるのは次の二つの要件を同時に満たすときに限られる。

(i) 文法機能が一致する。

(ii) 潜在的に最も重たい要素である。 (杉山, 1999:387 (一部改) )

簡単に述べると、文法的な (1) では、*wh* 句の痕跡と寄生空所はともに動詞の目的語 (object) であり、文法機能 (grammatical function) が一致する。さらに、目的語は文中で潜在的重量が最も重たい要素である。したがって、真の痕跡と寄生空所は (i) と (ii) を同時に満たすことになり、合法的と判断される。一方、非文法的な (2) では、痕跡が目的語であるのに対し、寄生空所が主語 (subject) となって

<sup>2)</sup> Riemsdijk & Williams (1986) , 長谷川 (1994) 等の指摘による。

<sup>3)</sup> 記述的一般化としては、Riemsdijk & Williams (1986:267) が述べているように、the bijection principle の緩やかな違反として処理される。



いる。逆に (3) では痕跡が主語であるのに対し、寄生空所が目的語となり、アンバランスが発生している。最後の (4) では痕跡と寄生空所はともに主語で、文法機能の面では一致するが、残念ながら主語は文中において潜在的重量が最も重たい要素ではない。その結果、(2,3,4) は寄生空所条件に対する違反として正しく処理されるという主旨であった。杉山 (2021) において、wh 疑問文の合法性を予測するメカニズムとして、wh 句が持つ潜在的重量と表層で付与される焦点 (focus) の焦点度重量を合算した相対的な得点システムが導入されたので、本稿では、新モデルの枠組みを用いて (5) の寄生空所条件をよりシンプルでエレガントな形式に修正することを目指す。

## 2. 文頭重心の原則

寄生空所構文は wh 疑問文であるから、バランス理論では「文頭重心の原則」(top-weight principle) に従うことになる。文頭重心の原則は、「文末重心の原則」(end-weight principle) と対極に位置し、以下のように定義される。

- (1) 文頭重心の原則：英語の wh 疑問文は、左下降傾斜、つまり、焦点が文頭にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

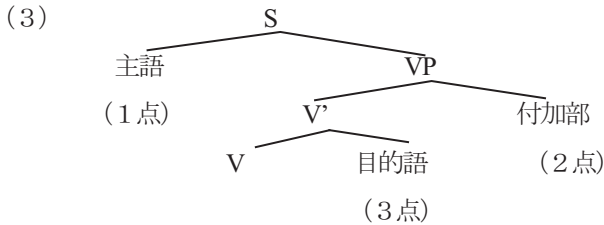
条件：wh 句焦点の総重量 = 5 点 (杉山, 2021: 35)

wh 句焦点の総重量とは、「潜在的重量」、「焦点度重量」、「wh 焦点度重量」という三つの独立した重量の総和である。まず潜在的重量とは、表層で焦点が決定される前の段階で各構成素に内在的に備わっている重量を意味し、以下のように階層構造上の位置に基づいて決定される。

- (2) 階層構造上の位置と潜在的重量の相対的關係：階層構造上、下位に生成される構成素ほどその潜在的重量が増す。 (杉山, 1999: 63)

この仮定に従うと、文中の主語、目的語、付加部 (adjunct) の潜在的重量はそれぞれ

れ (3) のように得点化される。階層構造において、上から主語、付加部、目的語の順に配置されているので、潜在的重量はそれぞれ1点、2点、3点と重たくなるようにランク付けされる。



次に焦点化重量とは、表層において実際に焦点として解釈される要素に付与される重量を指す。潜在的重量の軽い要素ほど有標の焦点としての解釈が強まり、付与される焦点度重量が相対的に増すと考え、焦点度重量は目的語が1点、付加部が2点、そして主語が3点という具合に潜在的重量に反比例して重たくなると仮定する。この仮定に従うと、各要素が焦点として解釈された場合、以下のように各構成要素の総重量は等しく4点になる。

- (4) a. **John** wrote a book last year.  
 b. John wrote **a book** last year.  
 c. John wrote a book **last year**.

次に **wh** 疑問文を形成する場合、通常の焦点度重量に加えて **wh** 焦点度重量として1点が加算されると仮定する。なぜなら、**wh** 句は文末重心の原則に合致した安定構造を左方向に逆転させるというダイナミックな働きを担うからである。その結果、(4)における動詞の目的語、主語、付加部を **wh** 句に置き換えて **wh** 移動を駆動した場合、最終的にそれぞれ以下のような同じ傾斜構造が形成される。

(5) a. What<sub>i</sub> did John write t<sub>i</sub>?

b.



(総重量：潜在的重量3点+焦点度重量1点+wh 焦点度1点=5点)

(6) a. Who<sub>i</sub> t<sub>i</sub> wrote a book?

b.



(総重量：潜在的重量1点+焦点度重量3点+wh 焦点度1点=5点)

(7) a. When<sub>i</sub> did John write a book t<sub>i</sub>?

b.



(総重量：潜在的重量2点+焦点度重量2点+wh 焦点度1点=5点)

ここで重要なのは、wh 句の元の要素が何であれ、総重量はすべて5点となり、同じ左下降傾斜が形成されることである。これらの得点結果を焦点の総重量に反映させたものが(1)で示した文頭重心の原則である。

### 3. 寄生空所構文における wh 句の総重量

さて、寄生空所構文の(1)は、(2)と(3)のような二つの wh 疑問文が合体した構文と考えることができる。

(1) What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> before you read e<sub>i</sub>?

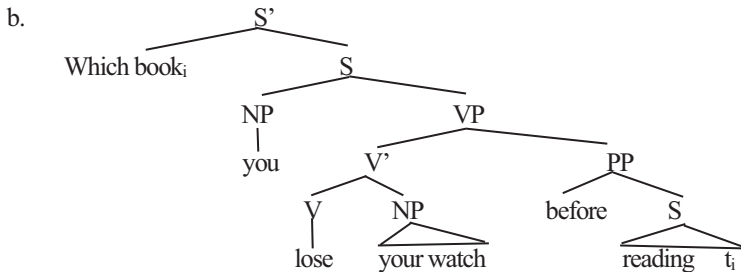
(2) What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub>?

(3) \*Which book<sub>i</sub> did you lose your watch [before reading t<sub>i</sub>] ? (Culicover, 1982:64)

文法的な(2)と非文法的な(3)を合体させたのであれば、(1)のマージナリティはある意味納得がいく結果と言える。周知のように、(3)の非文法性に関しては様々な説明が提案されてきた。例えば、生成文法では付加部条件(adjunct condition)

や Huang (1982) の摘出領域条件 (condition on extraction domain = CED) の違反として処理される。一方、バランス理論では、付加部内に生起する目的語 wh 句の総重量が文頭重心の原則を満たすことができないことから破綻すると説明される。

(4) a. \*Which book<sub>i</sub> did you lose your watch [before reading t<sub>i</sub>]?



c.

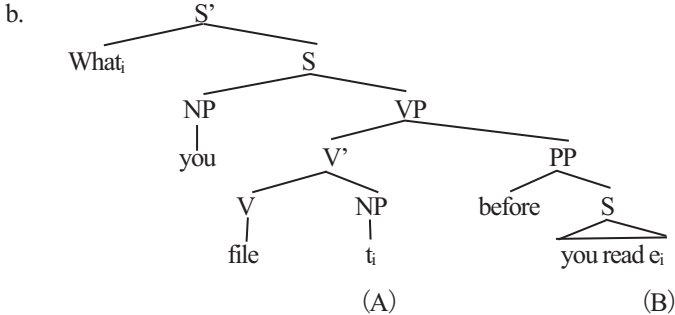


(総重量：潜在的重量 1 点＋焦点度重量 1 点＋wh 焦点度 0.5 点＝2.5 点)

付加部全体の潜在的重量が 2 点なので、P の補文の潜在的重量は半分の 1 点となる。最大投射 (maximal projection) の潜在的重量がその主要部 (head) と補部 (complement) に浸透するため、動詞の目的語である wh 句が担う潜在的重量は 1 点と設定される。同様に、付加部全体の焦点度重量が 2 点なので、寄生空所の焦点度重量はその半分の 1 点と換算される。wh 焦点度重量に関しては、埋め込み文内の要素なので、主節要素の半分である 0.5 点が与えられる。以上の総和である 2.5 点が当該 wh 句の総重量と算定される。ゆえに、文頭重心の原則を満たす規定得点の 5 点に及ばず、破綻することが導かれる。一方、(2) が合法的であるのは、wh 句の総重量が 5 点に達するからである。それでは、(2) と (3) を組み合わせた (1) はどのように

考えればよいだろうか<sup>4)</sup>。

(5) a. What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> before you read e<sub>i</sub>? (=1)



A の総重量が 5 点, B の総重量が 2.5 点となるので, A と B を単純に合算すると 7.5 点となる。しかし, この得点は文頭重心の原則が求める焦点の総重量の 5 点を大幅に超過するため寄生空所構文のマージナリティを説明することができない。そこで暫定的ではあるが, 寄生空所構文において文頭の *wh* 句が担う寄生空所分の重量は潜在的重量のみで, 焦点度重量 (*wh* 焦点度を含む) はカウントされないと仮定する。なぜなら, 文頭に生起する *wh* 句は一つだけなので, 文頭の *wh* 句に寄生空所が担うすべての重量を負わせる必然性はないからである。寄生空所の潜在的重量だけが真の空所に寄生するという仮定が正しいとすると, 以下に示すように A と B を合わせた総重量が 6 点となり, 文頭重心の原則が求める 5 点を 1 点だけ超過するという結果が得られる (二重丸は A と B が合体していることを表している)。

(6) a. What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> before you read e<sub>i</sub>?

(A) (B)

<sup>4)</sup> P の補部として文が生起するという構造分析は経験的な問題があるが, 付加部節の *before* 節は動名詞の場合と同様に, PP としておく。なお, *before* 句を S と分析しても結果は同じである。

b.



(総重量 : A (5 点) + B (1 点) = 6 点)

この1点という超過分が寄生空所構文のマージナリティに繋がると考え、本稿では寄生空所条件として(7)を提案する。

(7) 寄生空所条件 (1<sup>st</sup> version) : 英語の寄生空所構文は wh 句の総重量が6点の場合に限り容認される。

この条件によって、寄生空所の潜在的重量が1点未満となる構造は一律に排除することが可能となる。例えば、以下の寄生空所は付加部内の複合名詞句 (complex NP), wh 島 (wh-island), 付加部, そして主語名詞句の内部にそれぞれ生起しているが、その潜在的重量は明らかに1点未満と計算される。よって wh 句の総重量は6点に到達せず、排除されることが導かれる<sup>5)</sup>。

(8) a. \*What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> [after seeing [the woman who wrote e<sub>i</sub> ] ]?

b. \*What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> [before wondering [who read e<sub>i</sub> ] ]? (中村, 1996:251)

c. \*Which article<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> [before leaving [without reading e<sub>i</sub> ] ]?

b. \*What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> [without [a picture of e<sub>i</sub> ] having taken ]?

(大庭, 1998:189, 197)

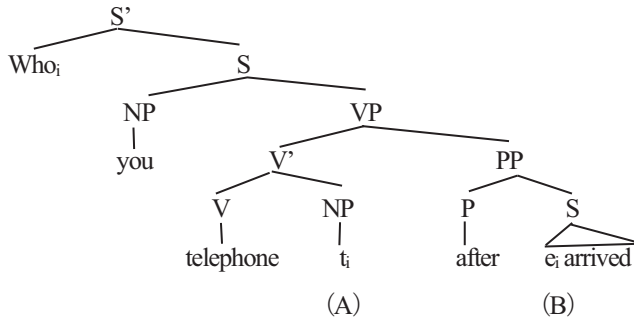
#### 4. 寄生空所条件の検証

本節では、序論で挙げた非文法的な事例が寄生空所条件によって説明可能か否かを検討し、必要に応じて修正を加える。第一の事例は、真の痕跡が目的語であるのに対し、寄生空所が主語の場合である。

<sup>5)</sup> 複合名詞句制約違反と wh 島の制約違反に関しては杉山 (2017, 2018) を参照。

(1) a. \*Who<sub>i</sub> did you telephone t<sub>i</sub> after e<sub>i</sub> arrived ?

b.



c.

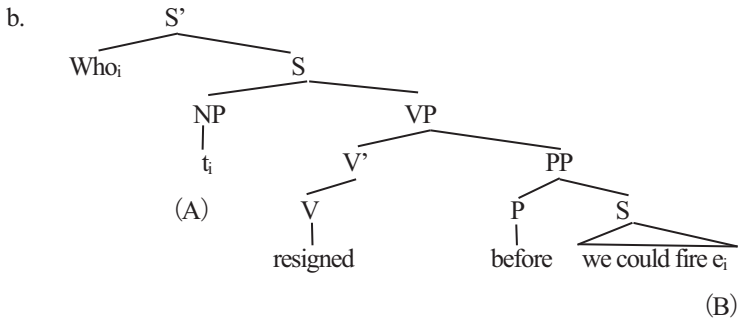
◎

(総重量 : A (5点) + B (½点) = 5½点)

第1節の(3)で示したように、潜在的重量の比率は動詞の目的語 : 付加部 : 主語が3 : 2 : 1であるので、付加部節内における動詞の目的語 : 付加部 : 主語の潜在的重量の比率は1 : ½ : ½と計算される。そうすると、寄生空所Bの総重量は潜在的重量の½点となるため、Aの総重量と合算すると文頭のwh句の総重量は5½点にとどまる。その結果、この寄生空所構文は破綻することが導かれる。

第二の事例は、真の痕跡が主語であるのに対し、寄生空所が目的語の事例である。以下に示すように、AとBを合算したwh句の総重量が6点となるので、規定の得点内に収まるのであるが、予測に反して非文と判断される。

(2) a. \*Who<sub>i</sub> t<sub>i</sub> resigned before we could fire e<sub>i</sub> ?



c.



(総重量 : A (5 点) + B (1 点) = 6 点)

この事態を解決するために、ここで文法的な構造と非文を再度比較してみることにしよう。

(3) a. What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> before you read e<sub>i</sub>?

b. \*Who<sub>i</sub> t<sub>i</sub> resigned before we could fire e<sub>i</sub>? (=2a)

すると、文法的な (3a) では、wh 句は「～を読む前にファイルする」という複合述部 (complex predicate) から「対象」 (theme) という共通の  $\theta$  役割 ( $\theta$ -role) を付与されるのに対して、非文法的な (3b) では、wh 句は「～を解雇する前に～が辞職する」という述部から「対象」と「行為者」 (actor) という独立した二つの  $\theta$  役割が付与されていることがわかる。そこで寄生空所条件を以下のように修正する。

(4) 寄生空所条件 (2<sup>nd</sup> version) : 英語の寄生空所構文は以下の二つの条件を同時に満たすときに限り容認される。

(i) wh 句の総重量が 6 点である。

(ii) wh 句の  $\theta$  役割が一つである。



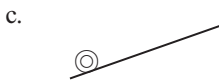
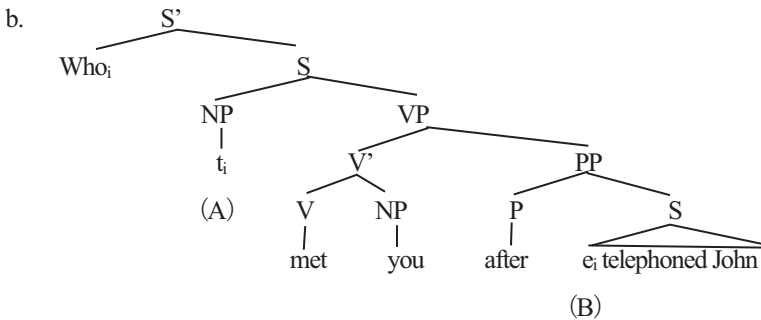
文法的な (3a) では (i) と (ii) の条件を同時に満たすのに対し、非文法的な (3b) では (i) しか満たしていない。なお、第一の非文を見てみると、(i) と (ii) の二つの条件に同時に抵触していることが判明する。

(5) \*Who<sub>i</sub> did you telephone t<sub>i</sub> after e<sub>i</sub> arrived ? (= 1 a)

なぜなら、「～が到着した後で～に電話する」という複合述語は wh 句に対して「行為者」と「対象」という二つの  $\theta$  役割を与えてしまうからである。

さて、第三の事例は、真の痕跡と寄生空所が共に主語の場合である。ここで wh 句は「～がジョンに電話した後であなたに会う」という述部から共通の「行為者」という  $\theta$  役割を与えられているので寄生空所条件の (ii) はクリアする。しかしながら、以下に示すように、A と B を合算した wh 句の総重量は 5% 点なので、寄生空所条件の (i) によって正しく排除される。

(6) a. \*Who<sub>i</sub> t<sub>i</sub> met you after e<sub>i</sub> telephoned John ?



(総重量 : A (5 点) + B (潜在的重量%点) = 5%点)

以上、本節では基本的な事例に関して寄生空所条件が妥当であることを検証した<sup>6)</sup>。

## 5. さらなる検証

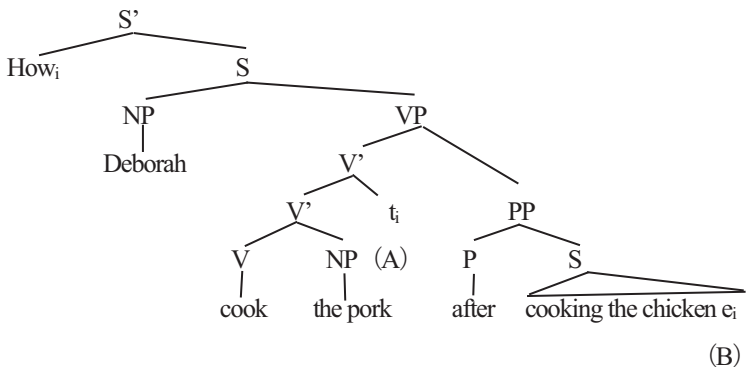
本節では、寄生空所条件の経験的妥当性を検証する。第一の事例は、真の痕跡と寄生空所の両方が付加部の場合である。

- (1) \*How<sub>i</sub> did Deborah cook the pork t<sub>i</sub>[after cooking the chicken e<sub>i</sub>] ?

(Nunes, 2004:135)

両方とも付加部なので $\theta$ 役割の面ではバランスはとれている。しかし、以下に示すように、主節に生じた付加部 **how** の総重量は5点、一方、付加部節内に生じた付加部 **how** の潜在的重量は3点となるので、合算すると5点となり、規定の6点に及ばず、(1) の構造は破綻することが正しく説明される。

- (2) a.



<sup>6)</sup> ここで挙げた三つの事例の中では、寄生空所条件の二つに同時に違反する (i) が最も違反の度合いが高くなる。違反の度合いと非文法性の度合いのあいだに相関関係が成り立つか否かは今後の課題としておきたい。

(i) \*Who<sub>i</sub> did you telephone t<sub>i</sub> after e<sub>i</sub> arrived ?

(ii) \*Who<sub>i</sub> t<sub>i</sub> resigned before we could fire e<sub>i</sub> ?

(iii) \*Who<sub>i</sub> t<sub>i</sub> met you after e<sub>i</sub> telephoned John ?

b.



(総重量 : A (5 点) + B (潜在的重量%点) = 5%点)

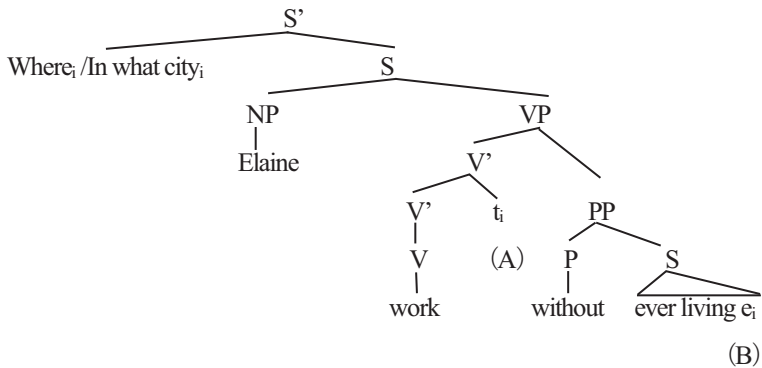
第二は、真の痕跡が付加部で、寄生空所が補部という事例である。以下の (3b) と (3c) の場合、主節動詞 **work** に後続する場所句は付加部であるが、付加部節内の動詞 **live** に後続する場所句は **live** が要求する補部である。したがって、痕跡の総重量は5点、寄生空所の総重量は潜在的重量の%点となるので、A と B の合計は5%点止まりとなり、6 点に到達せず正しく阻止される。(4) は (3b, c) の内部構造と傾斜図を示している。

(3) a. What city<sub>i</sub> did Elaine work in t<sub>i</sub>[without ever living in e<sub>i</sub>] ?

b. \*Where<sub>i</sub> did Elaine work t<sub>i</sub>[without ever living e<sub>i</sub>] ?

c. \*In what city<sub>i</sub> did Elaine work t<sub>i</sub>[without ever living e<sub>i</sub>] ? (Nunes, 2004:137)

(4) a.



b.



(総重量 : A (5 点) + B (潜在的重量%点) = 5%点)

ところが、(3a) から明らかなように、同じ付加部でも一語副詞ではなく、PP として具現化された場合、前置詞の目的語を *wh* 句とした寄生空所構文は容認可能となる。ここで (3a) を救うためには少しばかり想像力が必要となる。まず、付加部節内の [*live in*] という連鎖は再分析 (reanalysis) の結果、一語動詞として認知され、空所は目的語として扱われる<sup>7)</sup>。次に、主節の *work in* は本来、再分析を受ける連鎖ではないが、知覚のパラレリズムから、[*live in*] と同様に [*work in*] と認知されると考えられる。その結果、(3a) の *wh* 句は動詞の目的語として振る舞うことになる。もしその想定が正しいとすると、痕跡の総重量が 5 点、そして寄生空所の潜在的重量が 1 点と増量するため、両者の総重量のトータルが基準の 6 点を満たすことになる。知覚のパラレリズムという概念は、人間の普遍的な認知能力の一つであるので、寄生空所構文でも発揮されると考えるのはそれほど的外れではないと思われる<sup>8)</sup>。

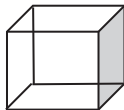
<sup>7)</sup> 再分析は動詞と姉妹 (sister) を構成する要素のあいだで適用される随意的な操作で、前置詞残留 (preposition stranding) を説明する際に効力を発揮する。(i a) のような補部 PP の前置詞は動詞と融合するが、(i b) のような付加部 PP の前置詞が動詞と融合することはない。再分析に関しては Hornstein & Weinberg (1981) を参照。

(i) a. Which solution<sub>i</sub> did you [<sub>i</sub> arrive at] t<sub>i</sub>?

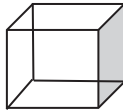
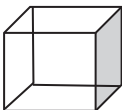
b. \*Which station<sub>i</sub> did you arrive [<sub>i</sub> at] t<sub>i</sub>?

<sup>8)</sup> 例えば、ネッカーの立方体 (Necker cubes) などが有名な例である。ネッカーの立方体とは、(i) のように、どの面が突き出ているかで二通りの見方が可能な立方体を指す。ところが、知覚上の制約により、(ii) のように二個並べると、どちらか一方の見方しかできなくなる。Lightfoot (1982) を参照。

(i)



(ii)



第三は、生成文法において反 C 統御条件 (anti-C-command condition) によって説明されていた事例である<sup>9)</sup>。

- (5) \*Who<sub>i</sub> did you tell t<sub>i</sub> about e<sub>i</sub>? (Levine & Hukari, 2006:43)

この場合、about 句の内部からは wh 句を単独で取り出すことができるので、厳密に言うと、e は寄生空所ではない。それでも寄生空所構文として扱うと、痕跡の総重量が 5 点、寄生空所の潜在的重量が 1.5 点なので、合計 6.5 点となり、基準点を超過してしまうという結論を導くことができる。

第四に、wh 句が動詞の補部の形容詞として生起した場合、寄生空所が容認されない事実が説明される。

- (6) \*How sick<sub>i</sub> did John look t<sub>i</sub> [without actually feeling e<sub>i</sub>] ? (Nunes, 2004:135)

wh 句は痕跡の位置で 5 点、寄生空所の位置で 1 点を有するので、wh 句の総重量は 6 点となる。しかし、当該形容詞は動詞と一体 (e.g. [look sick], [feel sick]) となって主語に  $\theta$  役割を与える側の要素であって、形容詞自体が  $\theta$  役割を担うわけではない。それゆえ、(6) は寄生空所条件の (ii) に合致せず、正しく排除される。

## 6. 反例と今後の課題

本節では、我々の枠組みでは説明がうまくできない事例を挙げて、暫定的な解決案を提示する。第一に、主語 NP 内に寄生空所が生じる事例である。

<sup>9)</sup> 反 C 統御条件と C 統御は、それぞれ以下のように定義される。

(i) Anti-C-command condition :

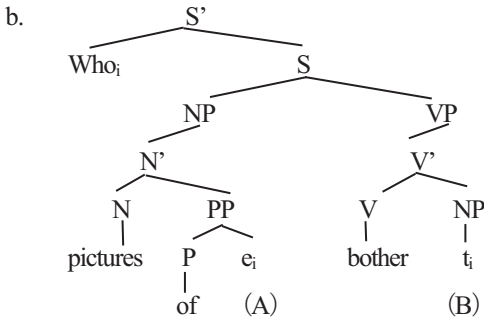
A parasitic gap is licensed by a variable that does not c-command it.

(Chomsky, 1982:40)

(ii)  $\alpha$  c-commands  $\beta$  iff the first branching node that dominates  $\alpha$  dominates  $\beta$ .

(Culicover, 1997:199)

- (1) a. Who<sub>i</sub> do [pictures of e<sub>i</sub>] bother t<sub>i</sub>? (Johnson, 1985:202)



(総重量 : A (潜在的重量 0.25 点) + B (5 点) = 5.25 点)

痕跡と寄生空所の  $\theta$  役割はどちらも「対象」であるのでバランスがとれている。しかし、内部構造から明らかなように、主語 NP 内の寄生空所の潜在的重量は 0.25 点、痕跡の総重量は 5 点なので合算すると 5.25 点となる<sup>10)</sup>。この得点は規定の 6 点に及ばないため、このままでは (1a) は誤って排除されてしまう。

ここで一つの解決案として、(1a) と今まで議論されてきた寄生空所構文との決定的な違いに着目する。

- (2) a. Who<sub>i</sub> do [pictures of e<sub>i</sub>] bother t<sub>i</sub>? (= 1a)

- b. What<sub>i</sub> did you file t<sub>i</sub> before you read e<sub>i</sub>?

その違いとは、(2b) では真の痕跡が寄生空所に先行しているのに対して、(2a) では寄生空所が痕跡に先行しているという点である。(2b) のタイプが無標の寄生

<sup>10)</sup> 主語 NP の潜在的重量は 1 点、N 補部である PP はその半分、そして P の補部 NP はその半分と減少していくため、0.25 点と換算される。

空所構文だとすると、(2a) に接した聞き手は主語 NP 内の空所を真の痕跡、動詞の目的語の方を寄生空所と無意識に認知してしまうと考えられる。もしそのような認知プロセスが正しいとすると、(2a) における wh 句の総重量は以下のように計算されるので、寄生空所条件に合致することが導かれる<sup>11)</sup>。

(3) a. Who<sub>i</sub> do [pictures of t<sub>i</sub>] bother e<sub>i</sub> ?

(A) (B)

b.



(総重量 : A (潜在的重量 0.25 点 + 焦点度重量 1.75 点 + wh 焦点度 1 点 = 3 点) + B (潜在的重量 3 点) = 6 点)

第二は、付加部の where と why のあいだで文法性に差が生じることである。

(4) a. Where<sub>i</sub> did Chris meet Sam t<sub>i</sub> [before meeting Pat e<sub>i</sub>]?

b. \*Why<sub>i</sub> did Chris meet Sam t<sub>i</sub> [before meeting Pat e<sub>i</sub>]? (Stroik, 1996:91)

我々の計算では、(4b) の why の総重量は 5% 点 (痕跡の位置で 5 点、寄生空所の位置で % 点) となるので正しく排除される。一方、その計算に従うと、(4a) の where も同じ得点となるので、誤って排除されてしまう。この問題を解決するためには、where/when と why/how の内在的な違いに訴えるしかない。つまり、以下の対比が示すように、前者は前置詞に後続することから、格 (Case) を持ち、一方、後者は前

11) 実際には以下に示すように当該現象の文法性に揺れが観察される。

(i) \*Which actor<sub>i</sub> [the story about e<sub>i</sub>] disturb t<sub>i</sub>? (Contreras, 1984:700)

非文と判断する話者は特別扱いををする必要がないので問題はないが、今度は逆に、上例ではなぜ真の痕跡と寄生空所の入れ替えが阻止されるかを保証しなければならないというジレンマが生じる。もっとも、真の空所と寄生空所の取り替えを認めるか否かに個人差があると考えれば、容認可能性に個人差が発生することの説明に繋がる。

置詞に後続しないことから格を持たないという違いである。

(5) a. From where did he come?

b. Since when have you been here?

c. \*For why did he come?

d. \*By how did he come?

(Huang, 1982:536)

格を持つという観点から見ると, where/when は項の what/who に近く, それだけ潜在的重量が重たい wh 句として認知されると考えられる。また, 意味的に考えても, 「会う」という動詞と「どこで」は結びつきが強い。したがって, (4a) の where は動詞の補部として扱われているとみなすことができる。一方, why/how は名詞性が弱く, さらに「会う」という動詞と結びつきが強いわけでもないので, 純粋な付加部として認知される。そうすると, (4a) は寄生空所条件をグレーではあるがクリアしていると考えることができる。

最後に, 寄生空所が動詞の補文内に生起している例が問題となる。

(6) Who<sub>i</sub> did you tell t<sub>i</sub> [that you would visit e<sub>i</sub> ]?

(Safir, 1987:680)

我々の予測では, (6) の wh 句の総重量は8点(痕跡の位置で5点, 寄生空所の位置で3点)となるため誤って排除されてしまう。しかし, 一見したところ動詞の補文と見える that 節が, 実は付加部位置を占めているという証拠が挙げられている<sup>12)</sup>。もし, その仮定が正しいとすると, (6) の wh 句の総重量は6点(痕跡の位置で5点, 寄生空所の位置で1点)となるため合法的であることが保証される。

<sup>12)</sup> 詳細は Saito (1991) を参照。ただし, that 節を付加部の位置に生起させるためには空の外置化 (empty extraposition) というアドホックな操作を想定しなければならない。



## 7. 結 論

本稿では、寄生空所構文の特異性を巡って杉山（2021）の新しいバランス理論の視点から再考察し、適格性条件として（1）を提案した。

（1）寄生空所条件：英語の寄生空所構文は以下の二つの条件を同時に満たすときに限り容認される。

（i）wh 句の総重量が6点である。

（ii）wh 句の  $\theta$  役割が一つである。

バランス理論では、焦点要素が文の傾斜を決定するという仮定に加えて、文中の各構成素が潜在的重量を持つという仮定が重要な役割を果たすが、これらの仮定が寄生空所構文によってさらに経験的に支持されることを主張した。

## 参 考 文 献

- Chomsky, N. (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Contreras, H. (1984) “A note on parasitic gaps,” *Linguistic Inquiry* 15. 698-701.
- Culicover, P. (1982) *Syntax*. New York : Academic Press.
- Culicover, P. (1997) *Principles and Parameters*. Oxford : Oxford University Press.
- 長谷川欣佑 (1994) 「That-trace 現象と寄生空所構文(4, 5)」『英語青年』2, 3 号, 560-562, 606-609.
- Hornstein, N. A. Weinberg (1981) “Case theory and proposition stranding,” *Linguistic Inquiry* 12, 55-91.
- Huang, C.T.-J. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*. Doctoral dissertation, MIT
- Johnson, K. (1985) *A Case for Movement*. Doctoral dissertation, MIT.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move- $\alpha$* . Cambridge, MA : MIT Press.
- Lasnik, H. and J. Uriagereka (1988) *A Course in GB Syntax*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Levine, R.E. and T.E. Hukari (2006) *The Unity of Unbounded Dependency Constructions*. California : CSLI Publications.

- Lightfoot, D. (1982) *The Language Lottery*. Cambridge, MA : MIT Press.
- 中村 捷 (1996) 『束縛関係』 東京 : ひつじ書房
- Nunes, J. (2004) *Linearization of Chains and Sideward Movement*. Cambridge, MA : MIT Press.
- 大庭幸男 (1998) 『英語構文論』 東京 : 英宝社
- Riemsdijk, H.C. van and E. Williams (1986) *Introduction to the Theory of Grammar*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Safir, K. (1987) “The anti-C-command condition on parasitic gaps,” *Linguistic Inquiry* 18, 678-683.
- Saito, M. (1991) “Extraposition and parasitic gaps,” in C. Georgopoulos & R. Ishihara (eds.) *Interdisciplinary Approach to Language*. 467-488. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Stroik, T. (1996) *Minimalism, Scope and VP-Structure*. Thousand Oaks : Sage.
- 杉山正二 (1999) 「英語の焦点移動現象—バランス理論からの考察—」 学位論文, 安田女子大学
- 杉山正二 (2017) 「Wh 島の制約と連続的段階性」 『英語英米文学論集』 26, 17-38.
- 杉山正二 (2018) 「複合名詞句制約違反と連続的段階性」 『英語英米文学論集』 27, 89-109.
- 杉山正二 (2021) 「文頭重心の原則と wh 移動」 『英語英米文学論集』 30, 31-49.

## 執筆者紹介

青 木 克 仁                      (認知意味論)                      安田女子大学教授

青 木 順 子                      (異文化コミュニケーション)  
安田女子大学教授

杉 山 正 二                      (英語学)                      岡山理科大学教授

# 学会活動報告

## 1 2021 年度講演会

7 月 15 日（木）まほろばホール（まほろば館 3 階）において講演会が行われた。講師はマツダ株式会社 コーポレート業務本部総務部 主幹（通訳） フーリストン 布久枝 先生。演題は「通訳の仕事で広がる学びの機会」

## 投 稿 規 定

- 1 会員による英語学、英米文学、英語教育学、異文化理解などに関する未発表の論文であること。
- 2 本論集は安田女子大学 文学部 英語英米文学科のホームページ上で公開し、著者には印刷物を2部寄贈する。
- 3 投稿書式設定と提出ファイル形式は以下の通りとする。
  - ・Microsoft Word 互換のソフトウェア(docx ファイルのみ)として保存し、PDF ファイルと共に編集長宛てに email で投稿する。
  - ・用紙サイズはA5とし、余白は上左右各15ミリ、下10ミリ、文字数と行数を、文字数35文字、行数を29行に設定する。
  - ・本文を日本語で書く場合のフォントはMS明朝(10ポイント)、英語で書く場合はTimes New Roman(10.5ポイント)の文字サイズを用いることとし、シングルスペースの行間とする。
  - ・題目(12ポイント・ボールド)は、2行目から書き出し、センタリングする。サブタイトル(12ポイント)は、題目の1行下に入れ、センタリングする。
  - ・著者名(12ポイント・ボールド)は、題目の後に1行スペースを空けて記入し、センタリングする。
  - ・Abstract(10ポイント)は、著者名の後に1行スペースを空けて書き始める。
  - ・Abstractは、日本語であれば400字以内、英語であれば200語以内とする。なお、abstractのタイトル部分のみ太字(ボールド)とする。
  - ・本文は、abstractの後に1行スペースを空け、セクションの題目(10.5ポイント・ボールド・センタリング)を挿入した後から書き始める。なお、セクションの数字は1から始めることとする。1.1.のようなセクションの下位項目の題目(日本語10ポイント・ボールド、英語10.5ポイント・ボールド)は、左詰めにする。
  - ・論文の長さは、注、図表、参考文献などを含めて10から20頁とする。
  - ・引用、参考文献などの書式は、それぞれの分野に応じたものを用いる。
  - ・注(9ポイント)は脚注とする。
  - ・投稿時には完成した原稿を提出し、校正は確認用のPDFファイルを一度送ることで最終とする。

### 附 則

この改正規定は、平成 5 年 6 月 1 7 日から施行する。  
この改正規定は、平成 9 年 6 月 1 9 日から施行する。  
この改正規定は、平成 1 4 年 6 月 2 0 日から施行する。  
この改正規定は、平成 2 2 年 5 月 1 3 日から施行する。  
この改正規定は、平成 2 5 年 6 月 1 7 日から施行する。  
この改正規定は、平成 3 0 年 7 月 1 2 日から施行する。

# 安田女子大学英語英米文学会会則

第1条 本会は安田女子大学英語英米文学会と称する。

第2条 本会は英語学・英米文学・英語教育学を中心とする学術的研究とその啓発を目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 研究会・研究発表会・講演会等の開催
- 2 機関誌の発行
- 3 その他必要と認められる事業

第4条 本会は次の会員および準会員で組織する。  
会員

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 本学大学院英語学英米文学専攻の在学生
- 3 その他、本会の主旨に賛同し、入会を希望して評議員会の承認を受けた者
- 4 会員は本会主催の行事に参加すると共に、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことができる。

準会員

- 1 本学文学部英語英米文学科の在学生
- 2 準会員は本会主催の行事に参加することはできるが、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことはできない。

第5条 本会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は本会の発展に貢献が認められた本学退職教員の中から役員会の推薦を受け、評議員会の承認をもって決定される。

第6条 本会に次の役員を置き、役員会を組織し、事業の運営にあたる。

- 1 会長  
本学文学部英語英米文学科長を充てる。
- 2 運営委員  
教員 若干名、互選により選出する。
- 3 会計監査  
(7) 教員 2名、互選により選出する。  
(4) 大学院生 1名、互選により選出する。

第7条 本会に次の評議委員会を置き、評議員会を組織し、事業計画の審議、会則の改正、監査報告の承認等を行う。評議員会は会長が召集する。評議員会は年1回以上開催する。

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 大学院生1名、互選により選出する。

第8条 評議員会は、構成員の過半数の出席をもって成立する。委任状はこれを認める。会則の改正には3分の2以上の賛成を要する。

第9条 役員は年度初めに選出し、評議員会において審議のうえ、承認する。役員の任期は1年とし、再任を妨げない。

第10条 本会の会員の会費は年額3,000円とし、毎年度初めに納入する。ただし、大学院生会員の会費は年額1,500円とする。2年以上連続して会費未納の者は、自動的に会員の資格を失うものとする。また、準会員の会費は無料とする。

第11条 本会は事務局を本学文学部英語英米文学科事務室内に置く。

第12条 本会の会則の施行に関する必要な事項は別に定める。

第13条 本会は平成3年4月1日に発足する。

#### 施行細則

- 1 運営委員（教員）は幹事、書記、編集とする。
- 2 教員の委員は5名とする。
  - (ア) 幹事2名、書記1名、編集2名とする。ただし、幹事のうち1名は運営委員長を務める。
  - (イ) 会計は本会事務局（英語英米文学科事務室）の担当とする。
- 3 会費の納入は、以下のいずれかによるものとする。
  - (ア) 会計へ直接納入
  - (イ) 現金書留での郵送
  - (ウ) 学会口座への振込

#### 附 則

この改正規定は、平成 6年5月19日から施行する。

この改正規定は、平成 8年6月13日から施行する。

この改正規定は、平成13年7月 5日から施行する。

この改正規定は、平成15年5月15日から施行する。

この改正規定は、平成22年5月13日から施行する。

この改正規定は、平成30年4月 1日から施行する。

編集委員 三宅 英文  
島 克也

英語英米文学論集 第三十号  
2022 年 2 月 18 日発行

発行者 安田女子大学英語英米文学会  
代表者 松岡 博 信  
広島市安佐南区安東 6-13-1

印刷所 株式会社 山菊